

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

## 第14回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2019 <sup>10/</sup>26<sub>土</sub>

— Kobe University Homecoming Day 2019 —

### 神戸大学ホームカミングデイ2019

10:30～記念式典  
 於：出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)  
 12:00頃～ランチ・パーティー(記念式典終了後)

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。

第14回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索



文学部のホームカミングデイは

## 午後1時から!

受付 13:00～13:30 文学部A棟1階エントランスホール  
 会場 13:30～16:50 文学部B棟132教室  
 17:00～18:30 瀧川記念学術交流会館(懇親会)



### ～文学部70周年を語る～

13:30～13:50 奥村文学部長挨拶  
 13:50～14:20 教員によるスピーチ

〈併設企画〉

12:50～16:30

文学部A棟1階エントランスホール  
 教育研究プロジェクトの活動記録など

真方忠道先生(哲学)・学園紛争時・池上洵一先生(国文学)：未定  
 お二人の名誉教授が語る「あの時・あの時代」をお楽しみに!

(休憩)

14:40～16:10 卒業生によるスピーチ

世代・時代が異なる同窓生が各10分のスピーチで、文学部初期の頃から近年までを回顧。市澤 哲教授(日本史学)の司会でお楽しみいただきます。

- |        |           |             |            |
|--------|-----------|-------------|------------|
| 永田 良   | ：初期の文学部   | (国文学・5回生)   | 1957年卒     |
| 西田 裕   | ：学園紛争     | (社会学・18回生)  | 1970年卒     |
| 鈴木 義和  | ：(未定)     | (国文学・28回生)  | 1980年卒     |
| 四方 俊祐  | ：阪神・淡路大震災 | (西洋史学・44回生) | 1996年卒     |
| 竹内 隆夫  | ：修士課程開設   | (修士・5回生)    | 1974年修了    |
| 松村 光庸  | ：博士課程開設   | (国史学・19回生)  | 2012年博士号取得 |
| (未定1名) |           |             |            |

(休憩)

16:30～16:50 第13回文窓賞授賞式、文窓会総会  
 17:00～18:30 懇親会／瀧川記念学術交流会館にて  
 (参加費：3,000円／当日)

【お問い合わせ先】

神戸大学人文学研究科総務係  
 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1  
 TEL:078-803-5591



文窓会主催 卒業・修了祝賀会



## 文学部創立

# 70

## 周年特別号



KOJSP 神戸オックスフォード日本学プログラム



文窓会主催 新入生歓迎ディナーパーティー

～10月26日(土)文学部ホームカミングデイにぜひお越しください～





## 文学部創立70周年を迎えて

人文学研究科長・文学部長  
文窓会名誉会長 奥村 弘

文学部は、本年70周年を迎えることができました。70年の歴史は、総合大学としての神戸大学の中に、人文科学を探究し文化形成の基礎を担う市民を養成する学部をしっかり位置づけ、その役割を強めていった歴史であったと考えます。その意味では、文学部で学び、社会の中で活躍されてきた同窓生の皆様そのものが、文学部の歴史であるといっても過言ではないと考えております。皆様の長年の御活躍に敬意を表するとともに、文学部の教育研究を持続的に支援していただいていることに対して、あらためて感謝いたします。3月のキックオフ国際シンポジウム「[MANGA]—人文学研究の新展開—」を皮切りに、本年度は、70周年企画を連続的に進めております。とくに、10月26日の神戸大学ホームカミングデーでは、各世代の同窓

生の方々が楽しくつどえるような企画を文窓会の皆様と一緒に用意しております。ぜひご参加ください。11月9日、10日には北京大学・復旦大学との国際シンポジウム、年明けには阪神・淡路大震災25年を迎える中で、災害と文化に関わる多様な展示やシンポジウムなどの企画を予定しています。また各分野でも全国レベルの研究集会を展開してまいります。さらに神戸新聞紙上で、本学部の教員による大型連載「21世紀の人文科学」を開始いたします。これらの企画の詳細につきましては、文学部のホームページを御覧ください。また70周年を機に、文学部の物的基盤を豊かにするために募金事業を進めております。人文学の基礎となる図書・資料等の充実をはかり、学生により良い学びの場を提供すること、本学部・研究科で培われた人文学の知を社会に発信していくための書籍出版助成を進めることの二つを主な目的としたものです。基盤的な教育研究環境を維持していくことが困難になる中で、これにつきましても、御協力のほど、よろしくお願いたします。最後になりましたが、文窓会会員の皆様のご健勝を心より祈念申し上げます。



## 文学部創立70周年同窓会発足66年

文窓会会長  
武藤 美也子

今年が平成から令和へと新たな時代が始まりました。文学部は1953年に第1回の卒業生を送り出し、同窓会が発足しました。そして2003年同窓会の名称が「文窓会」と命名され、会報誌も体裁を一新し「文窓(ふみのまど)」第1号を発行しました。昭和、平成、令和と同窓会は受け継がれて、今日に至っております。66年間の長い間文窓会が続いてこられたのは、ひとえに会員の方々の多くの支援があったからです。その一方で文窓会は大学・教員・学生に多くの支援を行なってきています。文窓会がどのような活動をしてきたかは「文窓会の歩み」(P14~15)で66年間を振り返っております。ぜひご一読ください。今年が創立70周年ということで、大学と協力してホームカミングデーの午後からの学部行事を、「70周年を同窓生とともに振り返る」ということで、各年代の同窓生の方7名に登壇いただきお話をさせていただきます。ぜひ大学に足を運び、新しい文学部の様子と各世代の同窓生の方々の話をお聞きください。文窓会としては今年の会報誌は特別号とし、頁を28頁に増やし全カラーで企画しました。内容も文学部の歴史、文窓会の歩み、各年代の同窓生の寄稿と、70周年を振り返るものになっております。文窓会をより身近なものに感じていただければと思います。

「文窓会の歩み」をお読みいただくと分かるように、文窓会は学部に対して多大な資金協力をしてきております。これらは我が母校のより良い存続こそが、同窓会の願いであり、使命であると考えからです。今年も文学部の「創立70周年記念事業募金」に100万円を寄付させていただきます。文窓会の寄付金で購入された書籍等には「文窓会寄贈」となんらかの形で分かるようにして頂くことにしています。また2011年神戸大学文学部とオックスフォード大学東洋学部との間で「神戸オックスフォード日本学プログラム(略称KOJSP=Kobe-Oxford Japanese Studies Program)」が締結され、今はオックスフォード大学の学生が神戸大学文学部生と学び舎をともにしております。この経験は学生にとって貴重なものになるに違いありません。このプログラムにも協力金を出し応援をしております。このようなことができますのも偏に同窓生の方々のご理解とご協力によるものです。2017年文学部の定員は15名削減され100名となりました。2018年から大学側は入学手続き全面郵送化を進めました。その為入会案内を個別に行うことができなくなり2017年には納入率が11%下がりました。定員減と納入率低下で文窓会の活動の縮小が懸念されました。しかし今年新入生に同窓会の存在意義と必要性をオリエンテーションで説明したところ、理解をいただき納入率が上がりました。とても嬉しいことです。今後も役員一同頑張っておりますので、皆様にも一層のご協力をお願いいたします。最後になりましたが、文窓会会員の皆様のご健勝と一層のご活躍を心より祈念いたしております。

## 今年も！文窓会の主な活動

### 文窓会主催 卒業・修了祝賀会



3月26日 ランスボックス2階で今年も盛大にお祝いました。

### 文窓会主催 新入生歓迎ティーパーティー



4月17日 文学部1年生と教員や先輩たちとのコミュニケーションの場を、今年も開催。

### KOJSP(神戸オックスフォード日本学プログラム)第7期生修了発表会



8月6日 瀧川記念学術交流会館大会議室にて発表会と修了式が行われました。

### 往年の文学部学舎と桜(1970~2006年のいつか)



昔の面影を残した本館(現A棟:1964年竣工)、その左手は新館(現C棟:1970年竣工)。2006年以降改修され、海側にB棟、またC棟には人文科学図書館と自主学習できるラーニングcommonsが設置されています。

### contents

- 02 文学部長・文窓会長ごあいさつ
- 04 神戸大学文学部の70年
- 06 教師が語る文学部
- 08 あの頃:私の在学時代と、それから
- 14 文窓会の歩み 同窓会誌『文窓(ふみのまど)』から
- 16 座談会:“花の9回生トリオ”文窓会を語る
- 18 文窓会を支えた方々
- 22 **速報** 第13回文窓賞《70周年特別賞》発表
- 23 文窓賞:受賞者の今
- 26 文窓賞受賞者リスト(2018-2007年)
- 27 2019年度東京支部便り・会計報告
- 28 ホームカミングデー2019ご案内

# 令和元年から 振り返る 神戸大学 文学部の 70年

今日の文学部の礎を築いてくださった先生方をはじめ大学関係の方々、諸先輩方のご苦労・ご尽力に敬意を表し、また後輩の皆さんとも積み重ねてきた歴史を共有したく、大学史・学部史の中からエポックメイキングな事柄を中心にピックアップしました。

## HISTORY

**1949(昭和24)年 5月**  
神戸大学が設置され文理学部が誕生  
戦後の学制改革により、国立学校設置法が公布・即施行された。神戸大学が設置され、文理学部を置くことが決定された。  
●この時の新制国立大学は計69校。神戸大学は1902 (M35) 年に設置された神戸高等商業学校を起点とする旧制神戸経済大学・同予科・同付属経営学専門部・姫路高等学校・神戸工業専門学校・兵庫師範学校・兵庫青年師範学校を包括して設置された。  
●学部は、文理・教育(赤塚山キャンパス)、法・経済・経営(現六甲台)、工学部(長田区松野通・水笠通)の6学部で発足。  
●文理学部文科(文学部前身)は、3学科(哲学/史学/文学)7専攻(哲学・芸術学・社会学/国史・東洋史・西洋史/英米文学)、入学定員は90人。

大学は誕生したものの…神戸大学は全国有数の大規模総合大学であるが、発足当時は次のような課題を抱えていた。

- ①大学院を持っていない
- ②上記の通り、キャンパスがタコ足だった
- ③前身各校の施設を引き継ぎ、施設面で不自由さを抱えていた
- ④学部間の一体性に欠ける
- ⑤文・理学部各々の独立

**同年 7月**  
文理学部 第1回入学式を挙行  
文科には78名が入学。9月より教養課程は神戸教養(旧御影師範)と姫路分校に分散して授業を開始。

この頃、文科教授会を巻き込み大学自治の危機とされた「神戸大学レッド・パーズ事件」(小松事件)が、社会的に大きくクローズアップされた。

**1950(昭和25)年～1951(昭和26)年 仮キャンパスから御影学舎へ**  
50年4月、神戸教養を御影分校とする。10月、六甲台学舎を借り、専門課程授業開始。51年7月、御影学舎竣工(教養と文理学部が使用)。10月、文科専門課程を六甲台より御影に移し授業を開始。

**1952(昭和27)年 4月**  
文理学部文科に国文学専攻を設置し、3学科8専攻となる。

**1953(昭和28)年 3月**  
初の卒業生を送り出す  
文理学部文科第1回学士試験合格証書授与式を挙行。卒業生38名が巣立っていった。

この年は旧制・新制の卒業が重なり、就職

難に直面。流行語は「コネ」。2年後、映画「大学は出たけれど」(監督:野村 芳太郎)が公開される。

**同年 4月**  
文理学部文科に1年の専攻生制度を開設(58年3月に廃止)。

**1954(昭和29)年 4月**  
神戸大学文学部が発足  
国立学校設置法の改正により文理学部を廃止。文学部・理学部が発足(7帝大以外の新制大学で初の認可)。今井林太郎教授が初代学部長に就任。文学部に93名入学。1956(S31)年3月、第1回文学部学位記授与式(卒業式)を実施。

**1958(昭和33)年 4月**  
大学院の前身にあたる文学専攻科が設置される(1年制)。

**1963(昭和38)年 4月**  
教養部を設置  
前年に竣工した鶴甲の一般教養学舎に教養部が設置される。

**1964(昭和39)年 4月**  
六甲ハイツ新校舎へ移転  
六甲台町に文学部・理学部の新学舎が竣工し、移転。敷地は六甲ハイツと呼ばれ、戦後進駐軍の家族住宅用に接収されていたが、58年に返還された。

同一年、医学部開設、姫路分校廃止、1966年には農学部開設と大学の総合化が進む。

**1968(昭和43)年 4月**  
大学院文学研究科(修士課程)を設置  
文学専攻科(1958～)は廃止とされる。

**同年 秋**  
大学紛争が広がり文学部も封鎖  
全国で大学紛争が起こる中、住吉寮の問題を発端に、神戸大学でも医学部を除く全学部が学生によるストライキでバリケード封鎖され、69年の入学式が中止された。学内が平常に戻ったのは、その年の9月以降。70年に大学院文学研究科第1回修士学位記授与式を行った。

**1971(昭和46)年～**  
キャンパスや学びが充実  
71年4月、本館東側に教育棟が完成。75年4月には研究科に外国人特別学生制度が開設される。

**1977(昭和52)年 4月**  
心理学・西洋比較文学・中国文学が加わり、3学科11専攻となる。

**1979(昭和54)年 4月**

**文学部創立30周年・大学院文化学研究科へ**  
大学院文学研究科に文化構造専攻(後期3年博士課程)が独立専攻として設置された。翌80年4月、大学院文化学研究科に移行。81年にはキャンパスに文化学研究科棟が竣工した。

**1992(平成4)年 4月**  
新たに地理学・言語学が加わり、3学科13専攻となる。

**1993(平成5)年 4月**  
かねてから検討されてきた4年一貫教育体制を反映したカリキュラムとなる。翌94年3月に教養部(教養課程)が廃止された。

**1995(平成7)年 1月**  
阪神淡路大震災が発生  
震災当日の様子を、1996年1月17日発行『神戸大学NEWS NET』紙面より～激震のあの日から一年 ドキュメント神戸大学'95～より抜粋してみた。

1月17日午前5時46分、近畿地方を襲った兵庫県南部地震で、避難場所となった神大には、学生や付近の住民約三百人が避難した。構内の建物には大きな被害はない模様。(中略)  
午前9時過ぎ、本や食品が崩れ落ちた状態のなか、神大生協ランスはいちはやく店を開けた。レジの代わりに電卓で計算。学生や近所の人はカップめんや菓子などを買いこんでいた。付近の公衆電話は長蛇の列で、一時間あまり待つ状態。  
●午前9時前、文学部南の生協ランス店責任者の西村稔祐職員は、心配で店に出勤。学生が次々に大学に上がってきて

## 終わりに

大学の経営が国から個別の国立大学法人に移管され、経済合理性の追求と同時に、知の世界でも表裏一体となったIT化とグローバル化への対応が強く求められています。

そこでは、自然科学系の強化、基礎科学系と実用科学系のウェイトの変化等が現実の課題としてクローズアップされ、産・官・学共に短期的思考が蔓延してきているのではないかと危惧しています。他方では、個人の行動規範や家族観、社会の価値観などの急激な変化も見逃せません。

今こそ、人文系を学ぶ意味・意義が問われ、人文学の立ち位置を見つめ直す局面にあるのではないのでしょうか。その意味で、文学部創立70周年をメモリアル年として、10年後・100年後の人や社会に思いを致して頂ければと思います。

参考文献 「神戸大学百年史部局史」[御影・六甲の半世紀] 企画・調べ 吉田 浩次  
社会学専攻 16回生 1968(昭和43)年卒業

店の前に集まり始めている。停電で自販機も停まり、水も出ないので食料などの販売を各店さみだれ的に始める。10時ごろには、あらかたの、菓子やペットボトル飲料が売り切れ。  
●9時半ごろ熊谷事務部長が人文・社会学系図書館に到着。惨憺たる状況。書架閲覧室などでは多数の書架が転倒。多くの図書が落下。

神戸大学では、学生39人、教職員2人、名誉教授1人、生協職員2人が亡くなり、負傷者は教職員・学生あわせて556人に達した。

**2001(平成13)年 4月**  
文学部を改組  
3学科(哲学科・史学科・文学科)を1学科(人文学科)に改組。その上で、5学科目15専修となる。内訳は(●哲学科/哲学、●文学科/国文学・中国文学・英米文学・ドイツ文学・フランス文学、●史学科/日本史・東洋史・西洋史、●知識システム/心理学・言語学・芸術学、●社会文化/社会学・美術史・地理学)。

**2003(平成15)年 10月**  
商船大学が神戸大学海事科学部になる。

**2004(平成16)年 4月**  
国立大学法人神戸大学へ  
大学設置者が国から国立大学法人になる。

**2006(平成18)年 10月**  
第1回ホームカミングデイの開催

**2007(平成19)年 4月**  
大学院の研究科廃止、文学部哲学科

が廃止  
大学院が改組・統合され、人文学研究科を設置。2専攻(文化構造・社会動態)5コース(哲学・文学・史学・知識システム論・社会文化論)となる。これにより10年に文学研究科、15年に文化学研究科を廃止。文学部では、2008年10月に哲学科が廃止となった。

**2011(平成23)年 3月**  
英国オックスフォード大学との学術交流協定を締結  
同時に締結された文学部と同大学東洋学部との「神戸オックスフォード日本学プログラム(略称KOJSP)」は、同大学東洋学部日本語専攻の2年生全員が1年間を神戸大学文学部で学習するというもの。2012年10月に12名の第一期生を受け入れて以来、双方の学生たちの交流や研究活動、また教員間の学術的交流も進んでいる。

**2016(平成28)年 4月**  
2学期クォーター制を導入  
1年間を4学期に分けて、学びの選択肢と自由度を高め、学生の海外留学を後押しする。新たな教育改革として全学に導入されたクォーター制が、文学部でもこの年度から始まった。

**2017(平成29)年 4月**  
文学部学生の定員が115人から100人に削減される。

**2019(平成31/令和元)年**  
文学部創立70周年を迎えた。



10年前の通学風景(2009年8月撮影)

## 協力する種としてのヒト

大坪 庸介

(人文研究科 心理学教授)

ヒトという種は非血縁他者と大規模な協力関係を形成・維持することができる(おそらく唯一の)種です。特定の二個体間での互恵的な協力行動は多くの種で見られます。また、大規模な集団での協力も、アリやハチに代表される真社会性動物で見られます。しかし、真社会性動物の集団は血縁関係にある個体によってできています。それに対して、ヒトの社会は多くの非血縁者同士が協力することによって成り立っています。狩猟採集民の社会では、大きな獲物は集団全体で分配されるのが一般的です。また、農耕社会では、村人全員が治水・灌漑に協力する必要があります。現代社会でも、バスや電車での体不自由な他者に席を譲るといった協力行動がみられます。



このように協力行動はヒト社会に普遍的・一般的に見られるので、そもそもなぜこんな自明なことを研究するのかと思われるかもしれませんが、しかし、協力は決して自明なことではないのです。なぜなら、協力行動には「ただ乗り問題」という解決の難しい問題がつきものだからです。例えば、大きな獲物が集団全体で分配されるのであれば、自分は狩りにいかずに他者の努力にただ乗りしようとする者が出てきてもおかしくありません。治水・灌漑の場合もわかりです。近くに体の不自由な人がいても、自分以外の誰かが席を譲ればいいじゃないかと思うこともただ乗りです。誰かがただ乗りを始めたら、協力している人も馬鹿らしくなってしまうでしょう。したがって、ただ乗り問題を解決できなければ、協力は維持できないということになります。

ただ乗りの問題は学術的にも重要です。例えば、進化論です。進化とは適応度の高い個体の遺伝子が自然選択により残り、適応度の低い個体の遺伝子が取り除かれるプロセスです。もしただ乗りした方が得になるのであれば、ただ乗り遺伝子の方が増えるはずですが、社会科学の分野では、ただ乗り問題

はホップズ問題とも呼ばれています。ホップズは社会秩序(協力)が自生することではなく、その成立には国家が必要であると考えました。進化論的に読み替えば、ホップズは協力が進化(=自生)するはずはないと考えたということです。それにもかかわらず多くの動物に協力傾向が進化していますし、国家成立以前の社会が完全な無秩序状態であったわけでもありません。こうした背景があるため、協力の進化の問題は生物学・社会科学・人間科学の多くの研究者の関心を惹き、科学雑誌サイエンスが2005年に選んだ今後解決されるべき科学の最重要課題のひとつにも選ばれています。

私の専門分野である進化心理学でも、ヒトの大規模な協力を支える心理メカニズムが検討されています。現在、特に注目されているのは罰と評判です。私自身も心理学実験により罰や評判の問題を検討しています。例えば、嘘をついた方が得になるときにも正直に振舞うことは協力の一例と考えられます。だとすれば、嘘つきに対する罰が協力の維持にかかわっているのではないのでしょうか。私の研究室では、自分自身は騙されていない第三者が、多少のコストは厭わずに嘘つきを罰しようとすることを実験により示しました。振り込め詐欺のニュースを見て、自分自身が被害者に遭ったわけではないのに、詐欺の犯人を懲らしめてやりたいと思ったことはありませんか？

また、非協力者に悪い評判がたち、非協力者には誰も協力しなくなることもただ乗り抑制の重要なメカニズムです。ですが、非協力者に協力しないこと(正当な非協力)とただ乗りのための非協力をどのようにして見分けることができるのでしょうか。従来のモデルでは、評判を付与する者が慎重に判断すると想定されていました。ですが、実験してみると人々はそれほど慎重な判断をしてくれません。私たちの研究室では、評判を付与される側が自分の行為の正当性を主張できるような仕組みを導入することで、理論的にも実証的にもこの問題が解決されることを示しました。

協力の進化というテーマは、動物の協力行動から現代社会に住む人々の協力、国家間の協力まで含みこんだ極めて学際性の高いテーマです。私も心理学実験という方法を使って、ヒトの協力の進化の謎に迫り、現代社会のただ乗り問題の解決に貢献できるように研究をしています。

## 漢語と辞書

釜谷 武志

(人文研究科 名誉教授/平成31年3月退職)

わたしは平成元年に神戸大学文学部に赴任して、この春に定年を迎えましたので、ちょうど三十年間在職したことになります。専門は中国古典文学で、その一端は「文学部だより」に書きましたので、ここでは一般の方々に少しは関心をもってもらえるかもしれない漢語と漢語の辞書について紹介しましょう。

もう二年近く前になりますが、友人たちと約十年かけて編纂した『新字源』新訂新版が店頭にならびました。1968年に出版された『新字源』の新訂版です。旧版は、小川環樹・西田太郎・赤塚忠の三氏の編になるいわゆる漢和辞典で、漢字の成り立ち・発音・意味の三点から説明し、あわせて多くの熟語を収録したものです。それまでの辞典と異なり、中国の漢字・古典語を対象をしぼっていて、国字とよばれる日本で作られた漢字や国訓といわれる日本独自の意味を峻別して掲出し、中国古典を読むための辞書として編まれました。内容の確かさと豊富さで群を抜いて、広く江湖に迎えられました。ちなみに編者の一人である赤塚忠(きよし)氏は、神戸商業大学予科、そして神戸大学文学部中国学講座初代の教官を務められました。その後、東大文学部中国哲学の助教授に転出されたのですが、この中国学講座こそ、今春までわたしが在籍していた文学部文学講座中国文学専修の前身です。

新訂新版は好意的な評価を得ていますが、付録の助字解説がなくなったのが残念だとの声も寄せられています。旧版では本文に出てくる助字の説明を簡単に、関心のある読者には付録で詳しい情報を提供していました。新版では本文中に用例も挙げてやや詳しく解説し、付録がなくてもすむようにという配慮をしたのですが、付録に慣れた読者には物足りなかったのかもしれない。

助字とは何かという定義は容易でなく、名詞や動詞などの実字に対して、前置詞・接続詞・感嘆詞などの虚字を指すと言われてはいますが、その境界は明確ではありません。広義の助字として、できるだけ多くの語とできるだけ多くの意味を取りあげれば、使い手にとって便利に思われます。しかしたくさん例を挙げて説明していくと、どんどんふくれあがっていき、一冊には収ま

りません。結局は、どこを割愛するかという決断を迫られてきます。

わたしは中学で英語を学び始めるときに英和辞典を買い求めました。購入の際に迷ったのは、大ききです。大辞典は一生使えることをうたい文句にしている、他を圧倒する収録語彙数を誇っています。これは一見便利そうに見えますが、初心者にしてみるとめったに目にしない単語が数多く載っていて、その中から目的の語とその意味、用例を探し出さなくてはならず、かえって不便です。むしろ初心者向けの小さな辞書が使い勝手がいいです。しかしその場合、数年後にはさらに大きな辞書に買い換える必要が生じます。

理想を言えば、学習段階に応じた辞書を数種類持つことでしょうか、懐事情もあってなかなか思い通りにならないとすれば、やはりある程度の語彙と意味を収録し、かつ初学者は初学者なりに必要な情報を手早く調べられる辞書が妥当なものになります。先ほどの助字解説にもどれば、基本的な解説と用例は本文に取り込んで、さらに詳細な情報を得たい場合は、そこからすぐに付録に移動できるもので、電子辞書がそのモデルになると思います。本文中にリンクを張っておけば、とりあえず本文中で用を足すことができ、不十分に思う人はそこからジャンプする方法です。じつはわたしはこの形式を思い描いていたのですが、紙媒体の辞書では思い通りになりませんでした。遠くない将来に電子版も出版できることを待ち望んでいます。



## 神戸大学と私

三宅 陽子

(英米文学専攻 5回生 昭和32年卒業)

昭和十六年、尋常小  
学校は国民学校になり  
ました。私は国民学校  
の一回生です。男女共  
学になり、新制中学校も  
一回生です。新制高校  
に入学した時には、す  
でに旧制制度の先輩が  
おられ、五回生でした。  
新制大学になり、女子  
も男女共学の大学に行けるようになりました。大学に  
進学することを夢見て、充実した高校生活を送りました。



神戸大学文理学部文科に願書を出し合格しました。

当時は、朝日新聞に神戸大学の合格者が載るよう  
な時代でした。英語を話せる国際人になることを夢見  
ていたので英文学を専攻しました。ところが国立大学  
の英米文学科は、とんでもない誤算でした。英語を話  
せるようにはなりません。英語を聞いたり話したり  
するような環境が整っていなかったからです。(幼児  
が言葉を覚え、喋れるようになるのは、環境の中で自  
然に覚えるからです)



自動車部のガレージ前で

御影分校での一年半の  
教養課程は、第二外国語  
の選択でクラスが編成さ  
れていました。他学部の学  
生と交流があり、八十歳を  
超えた今もクラス会を持っ  
ています。演劇部に入り、御影公会堂でのジュニア祭  
で、チーホフの「熊」を演じたこと、自動車部に入り、  
六甲台学舎の立派な玄関や現在の出光佐三記念六甲  
台講堂の前で、ハンドルだけしかないトラックや三輪に  
乗って練習し、十九歳で自動車運転免許証(昨年更新)  
を取得しました。

昭和26年に母が、幼稚園を創設していましたので、  
幼稚園も手伝っていました。教養課程の二年生の時、  
国文学の野中春水先生のご指導を頂き、幼稚園の園  
歌を制定しました。

専門課程では、英米文学を専攻し、その当時、日本

を代表する英文学者であられた工藤好美教授のほか、  
山本忠雄教授、神津春雄教授、谷口陸男助教授など  
大教授の講義を受けました。卒業論文は、George  
Eliotの“A Short Study of The Mill on The Floss”  
です。口頭試問で、工藤教授は卒業論文の内容はそこ  
そこで、「いつ 結婚しますか？」と尋ねられてしまいま  
した。一生懸命に書いた論文ですが、中身の無い貧  
相な論文だったのでしょう。専門課程に上がり、私は、  
姫路分校から来ていた将来の伴侶となる人と交際して  
いましたので、教授は暗に結婚を勧められたのではな  
いでしょうか。

母の幼稚園も手伝っていましたので、四年生になり、  
英米文学科の卒業論文を書きながら、教育学部で、文  
学部で取得した単位も利用して、幼稚園教諭一級免  
許状を取得しました。

結局、卒業と同時に幼稚園教諭になり、教育学部で  
お世話になった教授達のご指導を受けながら、昭和  
41年、学校法人に組織変更した舞子学園で、48年間  
幼児教育に専念しました。世界幼児教育機構(OMEF)  
のメンバーになり、活動したこともあります。

文学部同窓会、神戸大学クラブ(KUC)の設立にも、  
微力ながら協力させていただきました。現在、凌霄会  
(経済、経営、法学部の同窓会)の午餐会に毎月参  
加させていただいているのもそのご縁からです。

ホームカミングデイには、第1回から第13回まで  
全出席しています。毎月あるいは毎年出席することを  
目標とし、日々健康に気をつけております。凌霄会、  
ホームカミングデイ、神戸大学フェローの会(神戸大  
学基金)に参加することで、いろいろな刺激を頂き、生  
き甲斐にもなっております。

神戸大学に4年間在籍させていただいたお蔭で、  
様々な知己とご縁を頂き、私の人生を彩り豊かなもの  
にさせていただいたと深く感謝する毎日です。



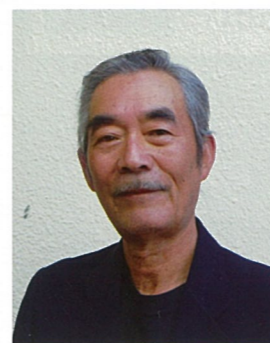
S28年6月 ジュニア祭(御影公会堂にて)  
チーホフの戯曲「熊」でポボーヴァ役を演じた

## 憂愁の坂道から

高堂 敏治

(哲学専攻 17回生 昭和45年卒業)

瀬戸内の海からキラキ  
ラと照り返すひかりの波、  
ゆっくりと背後からつつみ  
こむ緑なす六甲の山波。  
青春小説をほうふつさせ  
るような、爽やかな風が吹  
きよせるこの世界に、神戸  
大学文学部の学舎はあつ  
た。私の記憶から消えることのない風景である。



1965年4月、北アルプスをのぞむ北陸富山の農村  
から、いわば青雲の志をいだけて入学した文学部には、  
穏やかな春の陽光が降り注いでいた。灘区一帯をみ  
おろす石堀で、新入生が集って撮った笑顔の記念写  
真が、いまま埋火のように残っている。

鶴甲のすり鉢状の底にあった教養部に通いはじめ  
ると、学生の多くは受験時代にできなかった運動部や  
サークル活動に熱中していった。私もまた念願の空手  
道部に入学したが、住吉寮の副委員長になったことが  
きっかけで、学生運動部に移籍することになる。鴨子  
ヶ原にある男子寮では、デリケートな感受性と社会正  
義にあふれた年頃だけに、自分の夢や理想の社会に  
ついて、深夜まで飽きることなく語り合った。

また、異性との出会いにも胸をときめかせ、大学キ  
ャンパスを舞台にした、いくつかの淡い恋愛ドラマも、  
走馬灯のように甦る。教養部には、現在ではほとんど  
眼に触れることのない、学生自治会のタテカンがあふ  
れていた。そのタテカンを背景に、学生同士が政治  
や社会の不条理について、激論を交わしあうのも珍し  
い風景ではなかった。

文学部学舎に移ってからは、単位不足で教養部に  
通いながらも、哲学科のゼミは楽しかった。ヘーゲル、  
マルクス、サルトルなど、多くは英語版と日本語版では  
あったが、哲学徒の幸せな時間があつた。石塊が残  
る芝生で車座になり、タバコをふかしながらの青空ゼ  
ミでは、教授に難くせをつけるなど、想えば恥ずかしい  
かぎりである。

授業を受けた教授は既に鬼籍に入られている。忘  
れられないのは、無理難題をつきつける傍若無人な

私達に対する、恩師の寛容なすがたである。バリケー  
ド封鎖がはじまるまで、ゆるやかな左翼的雰囲気か漂  
う文学部は、このような牧歌的な空間であった。その  
学舎から阪急六甲へと降りる坂道には、まぶしいほど  
の夕陽が照り返っていた。

ところが、この牧歌的な世界は一変する。大学封鎖  
が始まると、取り返しのつかない事態へと変わっていく。  
振り返ると、バリケードによる封鎖によって、学舎や学  
術資料の毀損だけでなく、その事態のなかで人間の  
信頼関係も壊れていく。「青春とは自分が傷つだけ  
でなく、他者をふかく傷つけることだ」という苦い想  
いが甦る。

当時の世界で起きていたのは、アメリカのベトナム  
反戦運動、フランスの5月革命、中国の文化大革命。  
それら若者の運動に刺激されたのか、日本でも全共  
闘運動という大学の嵐(運動に関わる立ち位置によつて、  
大学紛争、或いは大学闘争とも呼んでいる)が吹きは  
じめていく。我が文学部はもとより、全国の大学にバリ  
ケード封鎖がはじまり、「自己否定」や「大学解体」など、  
想えば矛盾にみちた過激な言葉が吹き荒れたのである。

「人間は考える葦である」というのは、パスカルの言  
葉だ。風が吹けば、葦の葉や茎は右にも左にも揺れる。  
しかし、存在の根本はしっかりと根を張っている。その



嵐の中で「考える葦」と呼ぶには、私はあまりにも脆弱  
な存在であった。学費や寮費の値上げ問題などが反  
対運動の発端ではあつたが、吹き始めた運動は、問題  
解決の着地点を越境して暴走しはじめていく。つい  
には学舎のバリケード封鎖に至り、それが燎原の火のよ  
うに全国に拡大していったのである。学問の葦原ど  
ろか荒れ果てた風景が変わっていった。

いかに青年期の社会正義の理想があつたとはいえ、  
振り返れば、バリケード封鎖は、社会の不条理やエス

タブリッシュメントに対する、抵抗というよりも学生の反抗表現であった。私自身は学生運動からは離脱していたものの、まちがいに反抗者のひとりであったが、吹き荒れる熱風のなかで、反抗のレベルを超える「考える輩」にはなれなかった。

浪漫主義者、或いは理想主義者といってもいいが、政治など軽々しく現実世界に足を踏み出してはいけない、という先達の箴言もある。文学や芸術、ファッションなど自己表現の領域では、想像力や感受性を惜しみなく発露することも、理想の社会についてラディカルに議論することも、その考える自由があること自体は素晴らしいことだ。

しかし、社会運動であれ政治活動であれ、いったん現実領域に踏み出すときには、現実のプロセスをしっかり構想し、他者を傷つけることも覚悟（責任取敢）しなければならない。そのような思考と態度なしに、思い込みだけの社会正義観や、稚拙なイメージだけの激情的な行動は、行きつくところは残酷なテロリズムを孕んでいく。



全共闘運動が凄惨極まりない内ゲバという党派抗争をくりかえしながら、ついには大量殺人事件をおこしていく連合赤軍事件によって、終焉を迎えていったかにみえる。ところが、理想を追い求めたはずの若者の行動が、何故あそこまで残酷な事態に至ったのか、その思考プロセスを解説する者は少なかった。後年に起きた高学歴者によるオウム真理教の無差別テロは、その未熟な思考システム(病巣)の再発というしかない。

人間の考えることは、思考条件によって、いかに愚か極まりないものになり得るのか、思いしらされる。正義や真理と考えることも、その価値を支える思考の枠組によって、忌まわしい錯誤にもなる。「当然すぎる正義や美しすぎる理想には、常に懐疑的であれ」と自戒

するばかりである。正義や理想の価値を支える条件についての熟慮がなければ、それはいつでも極端なテロリズムに変わる。倫理判断抜きにすれば、科学技術の領域では、錯誤を犯すと、次の段階ではかならず修正進化していく。

だが、人間の精神領域では、ときには思考プロセスが退化現象を起こし、似たような錯誤をなんどもくりかえすことがある。

さて、哲学専攻の私は、卒業単位は揃ってはいたが、卒業後の自分がどこに行くのか惑いのなかにあった。卒論の代わりにと考え、神戸大学新聞の懸賞小説に「迷夢」を応募し特例佳作となるも、退学するまでには至らず学部留年となる。小説のタイトル「迷夢」そのままに悪夢の中をさまよっていた。つまり、極めてずさんな「F、カフカ断章論」を卒論にして、催促されていた授業料を納めて卒業したのである。

このように不様な卒業をした後も、惑いの季節はながく続いた。後年ようやく生業に就き、ときには暗むころを奮い立たせながら、卒業後50年の歳月を過ごしてきた。70年前後の団塊世代のなかには、志を得ずして煩悶の末に中退した者、トラブルを抱え大学から身を隠した者、病を得て鬼籍に入った者、長い裁判闘争を耐えていた者、教師を目指しながらも理不尽な就職差別にあった者、生きのびることを選択できず自死した者もいる。あの時代の暗渠に流されていった、彼らの魂魄を想うとつらい気持ちになる。

卒業後50年、表層ではあかるく振る舞っていても、団塊世代の深層史には、そのような冥府の世界が存在していた。生活者としては、日々それを考えている訳ではないが、忘れた頃に記憶の冥府から声が届いてくる。70年前後を生きのびた時間とは何であったのか、それを振り返る思索時間はあまり残されてはいない。古希を過ぎた人生の坂道を降りていくとき、六甲はいつも憂愁の夕映えに照らされている。



## 大学生生活四年間を振り返って

田中 勉 文窓会東京支部副会長  
(国文学専攻 20回生 昭和47年卒業)

### □語学クラス仲間との交友&学生運動

1968年4月鶴甲の桜が満開の頃、私は教養課程の一回生となった。語学の授業は法学部との混合クラスであった。当時、大学の自治を訴えた全共闘運動が全国的な盛り上がりを見せていた。同年12月中旬、神大も全学ストに突入し校舎は机や椅子でバリケード封鎖された。学生運動に対する意識は高く過激な中核、核マル、やや穏健な民青といったセクトに属する活動家もいた。学生運動の目的は同じでも方法論が異なると屢々口角泡を飛ばす激論となった。私はノンポリであったが、一度だけ民青系の知人に誘われ京都のデモに参加した。肩や腕を組み車道をジグザグ行進したが、機動隊の実力行使で進路を阻まれ隊列は崩された。国家権力を直に感じた貴重な体験であった。ストの長期化に伴い大学で仲間と会う機会は徐々に減り、学生課の掲示板を見に来る折等に阪急六甲駅近辺の茶店で歓談し近況等の情報交換を行っていた。自由な時間が増えるに連れ、家庭教師に精を出したり自宅で経典に耽ったりもした。仲間内でマージャンやビリヤードに嵌っている話もよく耳にした。仲間数人と梅田駅近くのダンス教室に通ったが、パートナーと組むと緊張してステップを間違えたり足を踏んだりで殆ど身に付かず終わった。振り返って学業は不振であったが大学生活はそれなりに楽しく充実していた様に思える。



### □金剛禅少林寺拳法部

少林寺拳法部に四年間在籍した私は、学部や年次を跨ぎ良き先輩・同輩に恵まれ充実した時間を過ごすことができた。まず思い出されるのは香川県多度津にある総本山での一週間の寒稽古である。日課は毎日略同じで宗道臣師家の法話に始まり高弟の模範演武、座禅と合同練習であった。往きは神戸港発22時半の船で、海側から眺めた神戸の夜景も美しく幻想的でした。赤穂の禅寺で夏季合宿をした際、「人間とは人で有る短い間を云う」との住職の法話が心に残っている。夕

食の後は先輩が鈴木大拙師の著書や道元の正法眼蔵の話を紹介し難解な禅や仏教談義に花が咲いた。午後の練習後、泳いで少し沖に出た時、海面からパタパタと何か空を舞ってバシバシと着水した。一瞬びっくりしたが、トビウオの群れとの一期一会であった。平日は工学部横の空地で15時位から薄暗くなる迄練習に励んだが、酷暑と六甲おろしは随分と身に当たった。共に汗を流した仲間と人生や恋愛、進路等々語り合えたことは懐かしい青春の1ページであった。

### □仏跡巡礼の旅と教育への夢

教職を諦め自分探しの旅を決し印ノ戦争直後の1972年1月、寝袋を背負い仏跡探訪の旅に出た。ブダガヤ(釈迦大悟の地)、ナーランダ寺院跡、カトマンズ等を訪れ、旅中半、ネパールで風邪を拗らせていた私はデカン高原の辺鄙な町で高熱を発し倒れた。滞在先のボーイさんに連れられ近隣の医院で九死に一生を得た。覚えているのはインド人医師が云った107度華氏(約42℃)、You are lucky! 注射位である。その夜は死の影に怯え寝付けなかった。幸い翌朝目覚め「命の有難さ」を痛感した。御仏の御加護で戴いたオマケの人生の意義を今以て問い続けている。早暁のヒマラヤ連峰の雄姿、コロンボの浜辺で眺めたアラビア海へ沈む真っ赤な夕日は強く印象に残る。以降、私にとって「人生は旅」であり、夢・冒険・ロマン(私物語を編む)が生きる軸足となった。会社に勤めて数年後、米国布哇(ハワイ)州認可の教育法人へ教務スタッフとして四年半駐在することになり教育への夢の一端は実現された。外から日本を見る機会を得て、帰国後、縦文字の国文学が新鮮で一層魅力的に感じられるようになった。

### □今の私と神戸大学

今年古希を迎え千葉の片田舎で晴耕雨読の生活を送っている。縁あって七年程前から東京六甲クラブの書道会に入り学部や年次を超えた先輩・同輩達との交友を楽しんでいる。また、文窓会東京支部の活動を中野支部長の下で地道に推進している。ここ数年文学部担当の講演会の企画運営を担務、文学部の先生方に講師をお願いし温かいご支援を頂戴している。今後とも神戸大学とご縁は私の生活のバックボーンであり心の支えであるに違いない。

## 芸・文・理融合プロジェクトから 文学部を考える

佐近田 展康 名古屋学芸大学教授  
(社会学専攻 32回生 大学院修士課程修了)

私が文学部32回生として哲学科社会学専攻を卒業したのは1984年、そのまま大学院文学研究科に進んで86年に修士課程を修了した。恩師は長谷川善計先生である。甲高い声とせつかなチェーン・スモーカーぶりが真っ先に想い出されるが、学問的パッションをたっぷり浴びる指導を受けた。



当時の社会学研究室には、退官を控えた杉之原壽一先生が威風堂々と構えておられ、北原淳先生はいつも日に焼けてアジアや日本の農村を駆け回っておられた。藤井勝先生が助手、油井清光先生は博士課程の先輩院生だった。時はバブル突入前夜、ベルリンの壁も静かに崩壊を待っている…そんな時代であった。

私はいま名古屋にある大学で教鞭を執っている。大学院に進み一度は社会学の研究職を志したが、その道を離れて紆余曲折しているうちに結果的にこうなった。アートやデザイン系の「創る」ことを学ぶ大学で、映像サウンド領域を担当している。もしアカデミック・キャリアや実務家キャリアの蓄積が、大学教員の「専門性」を担保するのだとすれば、私には何の専門性もない。市役所に勤務しながらパソコンのプログラムで自己生成する音楽制作に目覚め、その活動を通じてプログラミング関連書籍を執筆し、作品という形態で人工音声の現象学や機械テクノロジー論を論じ、現職になってからは映画における音の知覚構成機能について視聴覚メディアを使って論じている。しかし対象こそ違え、何事も歴史相対的に、システム論的に、現象体験レベルで考える思考枠組みは、間違いなく文学部の時代に学び取ったものである。

現在、京都大学の研究プロジェクトに参加してい

る。文理融合ならぬ、芸・文・理の融合、しかも芸術というロゴスとテクネーの「実践」によって、それら全体を先導する大それた目論見だ。背景には「文学部不要論」に代表される人文諸学軽視への危機意識がある。

一般に、この不要論は「役に立つ／立たない」の単純素朴な価値をめぐっているように見える。しかし、より本質的には、工学および近年のデザインの思想に見られる極端な「人間概念の単純化」に対し、長らくその歴史的複雑性を研究して来た人文諸学の成果が批判機能を果たしていない問題であるように思われる。「人の役に立たなければ意味はない」、なるほど。ではその〈人〉とは何か？植民地主義の下で基本的人権の思想が育まれた例を持ち出すまでもなく、〈人〉のためという大義で繰り返される苛烈な歴史的事実を見据えながら、数千年に遡るこの根源的な問いを引き受けて来たのは人文諸学に他ならない。「文学部不要論」はその数千年の問いの抹消である。

しかし同時に、人文諸学もまた「文字」という数千年前のイノベーションに依存したまま、自らの知を表現する技術に無頓着であり続けた。つまり、論文・書物のエクリチュールと、それが流通する言説コミュニティの存在をあまりに自明視しているうちに、文字メディアに依存しない「工学」が世界を変えたのである。芸術家・工学者であったダ・ヴィンチが、人文主義的アカデミーから受ける階級差別に抗議し、国王に地位向上の嘆願をしたのは、いまとなれば皮肉な話だ。

芸・文・理融合のプロジェクトは始まったばかりだが、技術知により人文知を体験可能なものとする、これまで芸術が行って来た実践が、真に実効性のある文理融合を導くことに尽力したい。そこには文学部が自ら工学的実践を行う未来像も含まれるだろう。

字数の関係上、ずいぶん拙速で乱暴な議論になった。こんな大風呂敷な暴論を吐いてはばからぬい教え子を、鬼籍の恩師はどうご覧になるだろうか？また一本、イライラと次の煙草に手が伸びる姿が見えるようだ。

### 筆者プロフィール

佐近田展康(さこんだ のぶやす) 1961年神戸市生まれ。神戸大学大学院文学研究科修士課程修了後、西宮市職員を経て、現在、名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科・教授。

## あの頃 私の大学時代とそれから ～文学部というビオトープ～

平井 悠貴  
兵庫県私立中学高等学校 国語科教員  
(フランス文学専修 平成23年入学)

学生時代の自分はどんなただらう。考えれば考えるほど、微笑ましい記憶に包まれていきます。多くの友と出会い、自分の世界がどんどん広がっていくのを感じ、偉大な先生方に導かれ、歩む道に光が灯っていくたびに力が湧きました。自分のいた環境は本当に恵まれた場だったのだと思います。



在学時代の私は、勤勉な学生というには程遠く、授業には出席するものの、別段深い知識を持って臨んでいたわけでもなく、授業の後はアルバイトやサークル活動に明け暮れていました。(ほとんど毎日スーツで大学に通っていたので、何なんだこの人かと思っていた人もいるかもしれませんが。)それはそれで得られるものもありましたが、今となればやはり、勉強にもっと時間を割いていければなあとも思います。そんな、なんともパツとしない自分を文学の世界に引っ張ってくれたのが先生方と友人や先輩方でした。私はフランス文学専修ですが、人数も各学年さほど多くはなく、学生同士と先生方との距離が非常に近かったということも要因になっているかもしれません。近しい距離感で多くの話をし、アドバイスをいただいたり、議論したり。少しずつ、自分がどんなことを学べば良いのかがわかっていく感覚でした。結果的にそれ程大きな功績を残したわけでもありませんが、高校生までの「勉強」ではなく、「研究」というものに触れられました。そうやって少しずつ大学での研究に面白みを見出している最中、四年生で教育実習を終えた後にはフランスへの一年間の留学にも挑戦しました。初めは全く考えてもいなかったことなので、自分でもその決断をしたときは驚いたほどで、いざというときになって不安にもなりました。それでも、「やってみたい」と思ったことを「やってみなよ」といって後押ししてくれたことに、感謝してい

ます。勉強も留学も、興味があるからやってみたい、深めたい、という感覚でやっていた私でしたが、周囲はそれを否定することもなく、むしろ周囲のそういったことへの探求心から自分がエネルギーをもらっていたと感じます。文学部というのは、そういう人たちが集まっている場なのではないかなと、今となっては思います。関心のあることに一心に打ち込み、納得のいくまで追求しようというエネルギーを持った人たちが、お互いにそれを認め合っのびのびと進んでいける。そんな環境なのではないかと。ともすれば、世の中では「そんなことをして何になるんだ」と言われてしまいそんなことでも、ここでは興味があるならそれが正義なのかもしれません。最初から意味が与えられていて、そこにある価値を効率よく得られることが評価されるだけならつまらない。そんな無機質なスマートさよりも、意味のないところに意味を見出し、真っ白なものに色を塗っていくことの方がよっぽど面白いと思うのです。あえて言うならば、そういった自分の興味関心への探求心こそが、人として魅力を発するに核たるものになるのではないのでしょうか。世間の利ばかりに振り回されず、己の理を追求してこそ、どんなことにでも立ち向かっていける強い人になるのではないのでしょうか。文学部という場は、そんな人としての魅力にあふれる者が集う場ではないかと思えます。

大学を卒業して早二年が経ち、社会人として三年目を迎えている私は、とある学校で教員をしています。子どもたちを前に話をし、授業をし、部活動を見ながら、毎日を慌ただしく過ごしています。この日々には際限がなく、正解もありません。何が正しくて、何が必要なのか、すべては状況次第です。答えのない日々にもそれでも真っ向からぶつかっていきこうという気持ちになれるのは、文学部で過ごした日々のおかげかと感じています。これからの時代にも、人が人として魅力を持っていけるように、文学部という環境で多くの人が成長し、自分の世界を広げて世の中を豊かにしていってくださることを願います。



# 文窓会の歩みー『文窓(ふみのまど)』から

文窓会会長 武藤 美也子

今年は神戸大学文学部が創立70周年を迎えます。

1953(S28)年3月に第1回卒業生38名を送り出し、それから66年経ち、今年2019(H31)年3月で文学部6698名、大学院人文学研究科(修士・博士課程)1711名が同窓生となっております。

下に文学部同窓会の歩みをまとめてみました。これで分かることは、文学部の先輩方が営々とこの会を育ててきてくださったということです。

同窓会というのは単なる同期生の旧交を温めるだけの組織ではありません。大学の主体は教員と学生です。この二者を応援すること、これも同窓会の大切な使命です。即ち多彩な学問分野での優秀なる教員を確保し、後輩には自由に学問できる充実した研究環境を与え、有為なる入学者を迎えること。同窓会の役割は母校の誇りを守り続けていくことにあります。

また特集記事一覧を見ますと、我々の先輩がいかに多分野で活躍しているのかが分かります。きっと神大文学部同窓生であることを頼もしく思うでしょう。



2003(平成15)年:文窓1号



初期の頃の同窓会報  
2002(平成14)年・第8号

2009(平成21)年  
リニューアルした7号

## 「文窓 ふみのまど」を中心に見る「文窓会の歩み」

### 1953(S28)年3月

文学部は第1回卒業生38名を送り出し、**文学部同窓会が発足**。初代会長は哲学科芸術学専攻1回生の成瀬不二雄氏。(歴代の同窓会長はp16-17欄外を参照)

### 2002(H14)年

**文学部同窓会東京支部設立**。初代支部長は小野幸次氏(社会学・5回)。

### 2003(H15)年:文窓1号

**同窓会名を「文窓会」とする。同窓会誌「文窓(ふみのまど)」創刊号発刊。**

編集長は鞍井修一氏(国文学・9回)。それまで「同窓会報」を9号まで発刊されていたが、これ以後新聞型から冊子型になる。

- 学術助成費として文学部へ100万円を寄付。

### 2004(H16)年:文窓2号

**国立大学法人化で「国立大学法人神戸大学」となる。**

11月の総会で広瀬豊英会長(西洋史学9回)から、安部栄治会長(社会学・9回)へ引き継がれる。

- 文窓会から文学部へ学術助成費90万円を寄付(2006年まで続く)

### 2005(H17)年:文窓3号

**文窓会東海支部発足**。総会開催。支部長は萩 紀男氏(国文学・8回)

### 2006(H18)年:文窓4号

**9月30日「第1回神戸大学ホームカミングデイ」を開催。**

文窓会総会、懇親会をこの日に合わせて開催することとなる。

### 2007(H19)年:文窓5号

**学生レポートコンクール「文窓賞」を設立**。学生の人間力と文学力、未来を応援する賞として実施。最優秀賞10万円・優秀賞3万円の賞金を提供。優秀作品は冊子とホームページで紹介した。

**東海支部を中部支部に発展的に解消**。中部支部長として勝原博氏(社会学・16回)就任。

- 文窓会より、文学部の施設改修に600万円を寄付(昭和39年竣工の文学部本館改修工事)
- 青野原俘虜収容所里帰り「神戸大学交響楽団によるウィーンでの再現演奏会」支援の寄付を行う。
- 文窓会から文学部への学術助成費50万円を寄付。

### 2008(H20)年:文窓6号

文学部新学舎紹介。  
● 文窓会から文学部への学術助成費80万円を寄付。

### 2009(H21)年:文窓7号

池上淑子氏(社会学・16回)会長に就任。  
『文窓』の編集長が田中睦子氏(芸術学・19回)に交代。冊子をリニューアル、文字を少なく写真等視覚的構成を重視する。その年に関連するテーマで特集記事を企画(別紙参照)

- 文窓会から文学部への学術助成費の寄付を、この年以後50万円とする。

### 2010(H22)年:文窓8号

**第1回新人生歓迎ティーパーティーを開催**。1年生の間から専修科目の情報に触れ、めざす学びとの出会いをサポートするべく、文窓会が主催し企画したもの。参加する

1年生は、軽食と飲物を取りながら、各専修の先生や院生との歓談を通じて専門分野の学びへのモチベーションを高めることができる。  
脇田晴子先生(国史学・4回生)文化勲章受章(神戸大学において初の受章)

### 2011(H23)年:文窓9号

「3月11日東日本大震災より被災地報告」岩手朝日テレビ 塚本京平氏(社会学・H22卒)  
当時、報道制作部記者であった塚本氏に、引き続き10、11、12号と被災地状況を報告してもらう。

### 2012(H24)年:文窓10号

**10月～「神戸・オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)」スタート**。  
オックスフォード大学東洋学部日本語学専攻の2年生を受け入れた。

- 文窓会よりオックスフォード支援金として15万円を寄付。秋には総合研究棟がリニューアル。

**同窓会名簿発行を見合わせ(19年度版が最後となる)**  
**12月 文窓会事務局を人文学研究科B棟1階に開設**。  
大学と正式に賃貸借契約を結び、多目的室の半分(約14㎡)を借りる。

### 2013(H25)年:文窓11号

4月 人文科学図書館内に自主的な学びと研究の場・ラーニングコモンズが設置される。  
7月29日 オックスフォード大学の留学生12名が文学部での履修を終え、全員がプレゼンテーションを行い、修了式、祝賀会を終え帰国。その後現在までこのKOJSPは続いております。

## 「文窓 ふみのまど」特集一覧

2003年(1号)	創刊 研究室便り
2004年(2号)	—————
2005年(3号)	先生特集
2006年(4号)	「教員が紹介する各専修のプロフィール」5講座15専修
2007年(5号)	留学生特集 当世留学生事情
2008年(6号)	文学部新学舎紹介
2009年(7号)	神戸の名社、敏馬神社 処女塚
2010年(8号)	文窓会会員とグローバル(日高・西川)
2011年(9号)	脇田晴子先生の文化勲章受章を祝って
2012年(10号)	くらし復興を後押し(震災後の文窓会員の東北支援)
2013年(11号)	インドネシアでJICAのODAプロジェクトに参加した1年間
2014年(12号)	文窓会員の近況レポート(岩手朝日テレビ・絵本読み聞かせ)
2015年(13号)	私の戦後とブレ六甲台時代
2016年(14号)	文系不要論にもの申す:私の生き方
2017年(15号)	若い世代からのメッセージ
2018年(16号)	私と本
2019年(17号)	文学部創立70年間の文窓会と会員の歩み

### 2014(H26)年:文窓12号

4月 池上淑子氏に代わり、武藤美也子氏が文窓会会長に就任。5月23日「池上会長を偲ぶ会」を開催。

### 2015(H27)年:文窓13号

**「戦後70年」を特集**。  
6月8日「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」文部科学大臣名の通知—人文学系学問の軽視との非難の声が高まる。  
6月28日 幹事会を開催。

### 2016(H28)年:文窓14号

2月 文学部定員削減に対し、文窓会として文学部と協議の上、学長に抗議の要望書を提出。  
前年の文科省の人文系不要論に対し「文系不要論にもの申す」を特集として組む。

### 2017(H29)年:文窓15号

**4月 文学部定員が115名から100名に削減される**。  
発達科学部と国際文化学部が統合され、「国際人間科学部」に。

### 2018(H30)年:文窓16号

入学手続きが原則郵送化に。これに伴い「同窓会費のお願い」も郵送化となる。  
定員減と郵送化の両方で、同窓会費納入率が11%減。

### 2019(H31/R1)年:文窓17号 文学部創立70周年特別号

同窓会の必要性を訴え、同窓会費納入率約90%に近づく。  
● 文学部創立70周年出版基金に100万円寄付。学部への学術助成費は割愛。  
文窓17号を「文学部創立70周年特別号」として発刊



# “花の9回生トリオ”文窓会を語る

70年前に文学部が誕生し、同窓会が結成されて66年。現在の「文窓会」を育ててきた多くの先輩方のバトンリレーとは？これまで活動を牽引してきた3人の先輩に語っていただきました。

## 文学部同窓会、ごくごく初期の頃(1953年～)

**日高** 僕が初めて文学部の同窓会に参加したのは、誰かに誘われたんだけど、花木さんやったかな。文学部1回生の岡田 章さん(英米文学)\*の当時、質屋をされていた家に行ったんです。まだまだ小規模な集まりでしたね。花木さんはそれより前から行ってたんと違う？

**花木** 実は私の姉の嫁ぎ先が岡田さんの近く。互によく知っていたので、ちょうど私が長年勤めた教師を辞めた頃、暇やったら手伝いに来てくれと言われ、岡田さんの店によく行っていた。もう40年くらい前の話ですが。

**日高** そのときに、一緒に同窓会の運営を誘われて。

**鞍井** 40年前と言ったら、僕らまだ電通にいた頃だね。リタイアしてから30年経つから。

**日高** 岡田さんはあのときの同窓会長だったね。

**花木** 岡田さんは3代目や。

**鞍井** そうか、じゃ、初代は誰だった？

**花木** 初代の同窓会長は、あの有名な(笑)成瀬不二雄さん(芸術学)\*や。岡田さんと同じ1回生で、私らが学生のときは芸術学の助手をしていたよね。そのすぐ後に奈良の大和文華館の学芸員になったはず。

**鞍井** 成瀬さんが芸術学の助手の頃は、詩人のボードレールを軸に、レンブラントやゴヤといった画家との関わりを研究発表していたのを覚えているよ。

**花木** 2代目の鍵本芳雄さん(哲学)\*も助手をしたね。

**日高** その頃、僕らは入学したんや。

**花木** 3代目の岡田さんまでが1回生だった。岡田さんが亡くなって、その後を5回生の沖野政弘さん(哲学)\*が引き受けてくれて。

**鞍井** 4代目の沖野さんはよく覚えているわ。卒業生の祝賀会は沖野さんの頃に始まったんだ。

**日高** そう、この人が長いねん。平成15年まで20年以上、会長を頑張ってくれた。沖野さんは最近まで同窓会に来てくれたからね。この前と言うても、もう大分前になるけど。

**花木** 沖野さんが会長のときは、メンバーもみんな5回生。副会長が女性の三宅陽子さん(英米文学)、会計が由良力さん(英米文学)、永田 良さん(国文学)もいたね。

## 「文窓会」と「文窓(ふみのまど)」命名(2003年)

**日高** その次の5代目からが、僕らと同じ9回生。先輩の方から広瀬豊英さん(西洋史学)\*を会長に推薦して引き受けてもらったから、我々も手伝ってほしいと頼まれた。

**花木** それまで名前のなかった同窓会が、「文窓会」に決まったのは、広瀬さんが会長のときだったね？

**鞍井** そう、同窓会の名称に「文窓会」はどう？と提案したら、みんなが賛成してくれてスムーズに決まったよ。

それまでの「同窓会報」も、僕が編集長になって、「文窓(ふみのまど)」と名付けて冊子にした。「文窓」の題字は国文学の福長 進教授にお願いして書いていただいた。

**日高** 今の「文窓」誌の骨格がこのときにできたんやね。

**鞍井** その頃、仕事で忙しかった僕を見て手伝ってくれたのが、20回生の中西みな子さん(英米文学)。沖野会長の頃から20余年もずっと同窓会に協力してくれている。

**花木** この頃に、会長の人事交代があった。

**鞍井** 我々9回生の学生時代は、教養課程が2カ所に分かれていて、専門課程で初めて一緒になった。広瀬さんたち姫路出身組と僕ら御影出身組とは、文化の違いといえば大げさだけど肌合いの違いを感じることもあったね。

**花木** そんな中、広瀬さんは同窓会に真剣に取り組んでくれていて、とにかく改革しようと意気に燃えていた。

**日高** 熱心なあまり、神戸大学全体の同窓会にあたる学友会で、他学部の同窓会メンバーとの温度差ができてしまった。広瀬さんが会長として取り組もうとしたのが、各同窓会が同じ額を納めていた学友会の運営費を、学部の規模に合わせて見直してはどうかということ。ところが学友会は、各学部の規模を問わず同じ額を納めることで、それぞれが平等に1票の決定権を持つという組織なので、そうすると学友会が根底から覆ることになる。

**花木** そこで、総会で現状維持か改革かの信を問うしかないということになり、同じ9回生の安部栄治さん(社会学)\*に立候補をお願いしたんです。

**日高** それで、秋の総会で安部さんが選ばれた。そのとき僕は中国へ行っていて、後で話を聞いたんやけど。広瀬さんは広瀬さんのやり方で、文窓会の発展に挑戦してくれたのだと思う。その後、6代目の会長を務めた安部さんは、バランス感覚のあるおだやかな人やったな。その後7代目を引き継いだのが16回生の池上淑子さん(社会学)\*。学友会でも熱心に活動して、早く亡くなったのが惜しい人。もうちょっと長生きしていたら、学友会では会長になっていたと思う。選挙で2位だったから。副会長をしていて、すごく人望と人気があったんや。

**花木** 毎年ホームカミングデイに文窓会の総会をしていますが、池上さんがその司会をしたときに自分の意見をはっきり述べた。それが会長に推されたきっかけだったね。

**鞍井** そして、現在の8代目・16回生の武藤美世子さん(国文学)\*が遺志を継いで、頑張ってくれている。新入生歓迎ティーパーティーの主催や神戸オックスフォード日本学プログラムへの協力など、文窓会の取り組みにも厚みが出てきたね。

## OBの想いが結実した「文窓賞」誕生(2007年)



お話をいただいた9回生の皆さん(左から)

**鞍井 修一氏(国文学専攻)**

(株)電通 関西支社 クリエイティブ局勤務、局長に就任。定年退職後は(学)大阪コミュニケーションアート専門学校(現・OCA大阪デザイン&IT専門学校)学校長を長年務めた。

**花木 直彦氏(国史学専攻)**

柿本人麻呂、山部赤人らにより万葉集に詠われた敏馬(みめ)の泊り。この地に創建された神戸最古の神社の一つ、敏馬神社の宮司を務める。長年、留学生を支援してきた。

**日高 健一氏(芸術学専攻)**

(株)電通 関西支社 クリエイティブ局勤務を経て、定年退職。在職中よりライフワークとしてきた中国古美術の研究と骨董収集の傍ら、西宮市樋之池町に中国骨董「波羅密蜜齋(パラミー)」を営む。

**日高** それにしても、今の文学部も文窓会も大人しい人が多いと思わないか？

**鞍井** 安部もデモもない世代だからな。僕らの頃は60年安部で、毎日がデモだった。

**日高** 60年の国会突入デモで亡くなった樺 美智子さん、その追悼デモで我々3人が一緒に花束と写真を持って歩いている写真が週刊誌に大きく載ったことがあったね。

**花木** 樺 美智子のお父さん、樺 俊雄さんは神戸大学の社会学の教授だった。新制神戸大学になった当時、文学部の社会学研究室の設立運営に携わったと聞いている。

**鞍井** 文学部も、神戸大学で初めて文化勲章を受章した4回生の脇田晴子さん(国史学)とか、素晴らしい業績を残した人をいっぱい輩出してきた。そんな風に夢や目標に向かってチャレンジする現役生を応援したいと生まれたのが「文窓賞」だね。

**日高** 文窓会で取り組む事業として、これはぜひやりたいと、役員会でいろいろ話し合った。当初の案は鞍井さんの提案で、文学的な創作ものを全学から募集しようという話になった。ところが、審査員を誰にするかがネックになって。大学の先生だけではなく、創作の分野で活躍している人に入ってもらうないと審査ができない。

**鞍井** 東京ならさまざまな出版社があり、編集長に頼んだりもできるんだけど。

**日高** そこで我々と先生方で評価できるレポートコンクールに落ち着いた。

**花木** それと、当時は新入生の同窓会費の受付を鶴甲の国際文化学部の廊下でやっていた、その時にたまたま見た何かのレポート募集の張り紙もヒントになった。暖房がないなか、とにかく寒かったので、よく覚えている(笑)。

**日高** ちょうどその頃、当時の松嶋隆二学部長から、近頃の学生は元気がない、何か元気の出る企画を文窓会で考えてもらえないか、という相談を受けていた。それでレポートコンクールの案を出したら、「それはいい」とたいへん喜んで乗り気になってもらったんです。

**鞍井** 学部として先生方にも全面的に協力させるから、と応援してくれたね。

**花木** そういえば、我々が携わる以前の文窓会の事業といえば、主に新入生の歓迎会と卒業生の祝賀会の2つ。おかげで我々のときには、残してもらった予算が潤沢にあって、思いきった取り組みができた。

**日高** 何しろ、郵便局の利息がすごくよかった(笑)。先輩が貯めてくれていたおかげで、文窓賞の賞金も出せだし、文学部の事業に寄付して環境の充実や学部内の活性化をサポートできた。多大な恩恵を受けたわけやね。

**鞍井** 考えてみると、最初の頃の同窓会は1回生、それを継いで5回生の皆さんが頑張ってくれて、僕ら9回生も文窓会に長く関わってきたわけだけど、そろそろ引退して文窓会を新鮮にしないとイケないと思うね。僕の提案は役員の任期を6年か8年制にして、3年か4年ごとに半数が入れ替わること。新しい風が入り、伝統も受け継げる。

**日高** 僕が一番やりたいのは、オックスフォードの留学生を文窓会の会員として、文窓誌を留学生個々に送り、ずっと文学部と繋がりをもってもらうこと。入会費は免除して。そうすると文窓会の幅が広がるし、短い期間であっても共に学んだ意義が深まる。文窓会の規約の中に入れてきちりと取り組んでもらうことが、僕の願いや。

**花木** それと役員の若返りも課題。我々の思いを受け継いでくれる協力者が進んで集まる文窓会にしくは！

**日高** 年取った役員がいると、僕なんかただでさえ声大きいので、若い世代はモノが言にくい(笑)。そろそろバトンタッチかな。

\*歴代会長の任期:①成瀬不二雄氏(1953~1960年)②鍵本芳雄氏(1960~1974年)③岡田 章氏(1974~1981年)④沖野政弘氏(1981~2003年)⑤広瀬豊英氏(2003~2004年)⑥安部栄治氏(2004~2009年)⑦池上淑子氏(2009~2014年)⑧武藤美世子氏(2014年~)

## 私と文窓会 1通の葉書から同窓会活動へ

中西 みな子  
(英米文学専攻 20回生 昭和47年卒業)

一通の葉書からの御縁です。

文窓会活動の協力の依頼の葉書を頂き、それが御縁で文窓会活動の一端を担うことになりました。

当時の会長は今亡き岡田氏が務められ、その

後に沖野氏が長期間に渡り務められました。其の頃です、私が活動を始めたのは、阪神大震災の数年前からですからもう四分の一世紀近く前になるでしょう。ですから記憶もいい加減です。そこは御勘弁を。年に数回集合が上がり、震災前の新聞会館、JR神戸駅前ビルの最上階、元町牡丹園の一室で色々なテーマについて話し合いました。その当時私は入会金が振り込まれているかどうかのチェック役。未納の方には何度か督促状を出し会員増強に努めました。未だにこの会員増強が一番大きな課題のようです。卒業式、入学式後に会員勧誘に努めました。寒い時ですからストーブを囲みながら「文学部はこちらです!」と声を張り上げて勧誘しましたがなかなか反応が少なく苦労しました。

卒業式の時は、式終了後LANSBOXにて卒業生、教職員等を招待して卒業修了祝賀会を催しました。会場は晴れ着、スーツ姿の笑顔と共に料理、飲み物を頂き、各学科は異なりますが四年間過ごした学生生活の思い出話に花を咲かせ楽しい時間を過ごしました。これから社会人になる後輩達が頼もしく見えました。だから誇り高き大学を卒業したプライドを背負い、大きく社会に飛び立って欲しいと期待しました。最後は色々な菓子が当たる抽選会をして幕を閉じました。

又入学式の時も同じように宴を催しました。卒業式とは違い期待に胸膨らませたピカピカの新入生です。これからの抱負、疑問、大学への期待等を話し合いながら食事と共に楽しい一時を過ごしました。やはり



その時も最後は抽選会。美味しい菓子を当て嬉しそうな顔で閉会を惜しみました。

同窓会誌「文窓」も編集しました。編集長が決まり毎年発行する事になりました。どんなテーマにするのか、どなたに原稿を依頼するのかと毎年頭を悩ました。

又文学部での学生生活でチャレンジしようとしている事、成し得た事、目標や現状、体験をレポートしてもらう「文窓賞学生レポートコンクール」を行っています。文学部長をはじめ数名の先生方と文窓会役員による選考会が開かれ、優秀な作品には最優秀賞や優秀賞を授与。表彰状に賞金を添えています。若者らしい生き様、挑戦、ビジョンについて新しい世界を見せてくれる作品が多数ある年もあれば、少ない年もありました。

優秀作品の表彰はホームカミングデイにて行なわれています。ですから是非年一度のこの機会に参加され、現在の学生達の心境を理解されたら良いのではないかと思います。

私達が活動していた頃は、学舎は私が学んだ時のままでした。事務室、学長室等学生時代を思い出しました。食堂はなくなりましたが、その少し南側に残っているテニスコートで、毎年教職員、事務の方々と試合があり、私達同窓会役員も弁当持参で参加させて頂きました。

私の学生時代に授業を受講した恩師とか各分野で活動されている先生方との交流もあり、学生時代にタイムスリップしたようでした。残念な事に私の学生時代は学園紛争の真最中だったので四年間を少し削られたみたいに思いました。そしてトコロテン式に卒業しました。

でも学生生活の楽しかった思い出は沢山あります。同窓会という組織を知るまではもう大学とも思い出だけで終わりかと思っていました。が、あの冒頭の葉書からの御縁で学年を超えた同窓生の方々とお会いして同じ活動をする事が出来るようになりました。私の周りの世界が変わったようです。一生の中で多くの人との出逢いは素晴らしい事だと思います。それも同じ学舎で青春を過ごした人達とです。だから同窓会活動は年を越え環境を越えて楽しむ又勉強になる場だと思います。

この文窓会の輪がどんどん大きくなり、その中で色々な経験をさせて頂く事を期待しています。

## 中部支部の再興を! 中部支部(旧東海支部) 初代支部長 萩 紀男

(国文学専攻 8回生 昭和35年卒業)

文窓会中部支部は目下休眠状態にある。これは実に残念なことである。何とか再興したいと思うのだが、私たちの世代は既に歳を取り過ぎた。後の世代に希望を託す以外にない。そのためには、よいことも悪いことも含めて、全て赤裸々に中部支部の歴史を語っておくのも意味のあることだと思う。例えそのことで不愉快な思いをする方があったとしても、ご容赦願うしかない。

十数年前、当時の文窓会会長から中部支部を設立するよう依頼があった。応諾した私は、中部八県の文窓会在住者に参加を呼び掛けた。ところが交通体系や文化圏の相違からか、北陸三県と長野県の反応はいま一つであった。いきおい、静岡、愛知、岐阜、三重の東海四県を対象とせざるを得なかった。そこで取敢えず東海支部として発足することにし、第一回総会を2005年4月17日名古屋駅前のホテルで開催した。総会の後、講演会と懇親会を実施した。講師には名古屋大学名誉教授の山下宏明先生をお願いした。先生は、『平家物語』など軍記物語研究の第一人者であると同時に、国文科最初の卒業生である。講演の内容は文学部草創期の話が中心であり、研究分野の話題は殆んどなかった。出席者の中には文学部創設間もないころ学生であった世代の人々が多かったこともあり、会場は深い感動に包まれた。私もその一人として、あの時の静かな興奮を今もって鮮やかに思い出すことが出来る。

その後、講師には、当時文学部長の松嶋隆二先生や後に文化勲章を授与された脇田晴子先生をお願いした。2007年には、文窓会本部による運営費の一部補助が決定され、以後財政的にも安定した。またこの年、東海支部を中部支部に名称変更した。初期の目的が一応達せられたので、一世代若い方に後事を託して私は身を引いた。後任の方



も随分ご努力いただいた。この機会に深甚なる謝意を表したいと思う。

その後、講師としては、名古屋大の江村治樹先生、三重大の藤田達生先生(二度講演)、中京大の張勤先生、静岡県立高校教員の磯部修三先生、国際日本文化研究センターの劉建輝先生、名古屋市博物館の小川幹生先生をお願いした。しかしその間、参加者数は一向増えず、逆に減少傾向を示した。そのため、2011年以後、総会開催を2年に1回とせざるを得なくなった。思えばこれが分岐点であった。何ごと守勢に回れば、後は衰退しかない。何としても年1回の開催は厳守すべきであったと思う。以後、参加者数はさらに減り、遂には2015年以後、休眠状態に陥ることになった。誠に残念至極である。

さて、振り返って見れば、休眠に至る原因は次のようなことであったと思う。

### 1. 参加者を増やすことが出来なかったこと。

会員が中部支部の存在に何を期待し、何を求めているかを把握し、適確に対応する努力に欠けたのではないかと思います。

### 2. 講師をお願いすることに限界があった。

名簿を見れば、相応しい方を見出すのはさほど困難ではなかったとも思う。ただ、東海四県在住者に限れば、或いは困難があったかも知れない。けれども、四県出身者や四県に所縁のある方、名誉教授の先生方など、範囲を広げれば解決できたのではないかと。

しかし、こうした問題はあったにしても、それよりさらに大きな原因は、幹部の間で有効な協力体制を築けなかったことにあると思う。衆知を集めれば大概のことは成就する。それが出来なかったことが悔やまれてならない。まさに内心忸怩たるものがある。

何とかして中部支部を再興したいと思うのだが、私たちはすでに年老いた。若い人たちにお任せする以外ない。その際、私たちの失敗の記録を参考にさせていただければ、幸いである。

残り少ない人生ではあるが、いつの日か再び中部支部総会で同窓の皆さんにお会いできることを夢見ながら、本稿を閉じたいと思う。

文窓会東京支部の歩み

東京支部 東京支部長

中野 裕

(英米文学専攻 9回生 昭和36年卒業)

1) 1993年に凌霜会(六甲三学部・経済・経営・法学部の同窓会の総称)が東京凌霜クラブに名称を変更、同時にこのクラブに東京KUC(全学部の組織)を併設し、全学部の卒業生に同クラブの利用を呼びかけた。(2011年4月に一般社団法人神戸大学東京六甲クラブになった) 1995年ころに文窓会(文学部のOB・OG会)の会長に就任された沖野政弘会長(S32年卒)の依頼を受け、文窓会東京支部設立を任されたのが、同期(S32年卒)の小野幸次様で、凌霜クラブに出入りしていた小生が手伝いをするようになった。



2) 2002年2月28日(木)に第一回の総会、木曜会を開催するにあたり、当時発行されていた文窓会の名簿から、関東在住の方を抽出し、第一期生(S28年卒)から第十三期生(S40年卒)112名に第一回の文窓会東京支部総会開催の案内状を発送した。

第一回の参加者は20名と少なかった。この会で、会長:小野幸次様(S32年卒)、副会長:河野房子様(S35年卒)、副会長:中野 裕(S36年卒)と決

定した。

次回の総会は、東京六甲クラブ主催の木曜会(11学部持ち回り)の文窓会の担当日に開催することに決定した。

3) 現在までに、文窓会総会・木曜会は14回(2002年2月から2019年4月まで)行われている。詳細は別表を参照願いたい。

4) 現在は、中野 裕(会長)及び田中 勉(副会長)の二名で、運営にあたっている。田中副会長は、木曜会の講師選定に多大の尽力をしてくれている。

5) 手元には、昭和28年から平成30年卒までの「メル友330名、郵送友80名」の名簿があり、メル友には、文窓会本部、東京六甲クラブの情報を、その都度お知らせしています。

毎年、文窓会本部より新卒者の名簿を送ってもらい、その中で、関東在住と思われる方を抽出して、東京支部の名簿に加える方式を取っています。

追記: 私事で恐縮ですが、凌霜会(経済経営法学部のOB会)とのかかわりを余談でお知らせします。

バンコク駐在9年の間、現地の凌霜会に入り活動をした。その後のマニラ駐在2年半、中国広州駐在2年半は、小生が現地の神大卒業生のまとめ役として、凌霜会を組織し活動をした。帰国後、東京の凌霜クラブに出入りし、凌霜会のオブザーバーとしての入会を、また同期会(36年会=山麓会という)で正式会員に認められ、これらが契機となり、全学部の同窓会組織へ繋がる事ができたと自負しています。

文窓会東京支部総会&東京六甲クラブ主催・木曜会 (第1回から第14回まで)

開催日	総会参加者	木曜会の演題	講師	経歴	参加者
第1回 2002年 2月28日	20名	和語の文化、漢語の文化—日本語は何を描いたか	白藤 禮 幸	帝京大学教授(当時)(国文学9回)	60名
第2回 2003年10月23日	20名	今どきの若いものについて考える	岩崎 信 彦	神戸大学文学部長(当時)	50名
第3回 2005年 7月28日	14名	福原遷都について	高橋 昌 明	神戸大学文学部教授(当時)	50名
第4回 2006年11月30日	19名	相撲はなぜ女性を拒否するか—けがれ思想と女人禁制—	脇田 晴 子	滋賀県立大学名誉教授(当時)(国史学4回)	50名
第5回 2007年10月25日	13名	つばやきを形に思いをしくみに	世 古 一 穂	金沢大学大学院人間社会環境研究科(当時)(社会学23回)	23名
第6回 2009年 2月26日	19名	笑い与健康	澤 田 隆 治	働東企画会長・働テレビランド(当時)(国史学3回)	50名
第7回 2010年 6月21日	18名	いい加減な人ほど英語ができる	堀 江 珠 喜	大阪府立大学教授(博・文化構造学S57)	30名
第8回 2011年10月27日	10名	日本の中世の女性	脇田 晴 子	滋賀県立大学名誉教授(当時)(国史学4回)	30名
第9回 2012年 9月27日	9名	平清盛像の虚実	高橋 昌 明	神戸大学文学部名誉教授(当時)	40名
第10回 2013年10月24日	10名	聖徳太子の虚像と実像	古 市 晃	神戸大学大学院人文学研究科准教授	30名
第11回 2014年 2月24日	12名	仏画の魅力とその見方、楽しみ方	増 記 隆 介	神戸大学大学院人文学研究科准教授	35名
第12回 2016年 4月28日	12名	仏画の魅力とその見方、楽しみ方 Part 2	増 記 隆 介	神戸大学大学院人文学研究科准教授	37名
第13回 2017年11月 9日	15名	シェイクスピアをめぐる驚きと感動の旅—ストラットフォード・ヴェニス・日本—	芦津 かつお	神戸大学大学院人文学研究科准教授	30名
第14回 2019年 4月25日	14名	シェイクスピアをめぐる時空を超えた旅物語の第二弾	芦津 かつお	神戸大学大学院人文学研究科准教授	26名

第1回から5回までは役員として小野幸次・東京支部会長(S32年)が担当。第6回以降は中野 裕・同が担当した。  
 1) 学友会東京の役員会は下記の9同窓会(11学部)により構成され、3ヶ月に一度開催。文窓会としては、役員:中野・田中が参加している。  
 2) 神戸大学・同窓会は下記となっている。文窓会(文学部)、紫陽会(教育学部=発達科学部が国際文化学部と合併して=国際人間科学部となる)、凌霜会(経済学部、経営学部、法学部、国際協力研究科)、くさの会(理学部)、神緑会(医学部医学科)、就進会(医学部保健学科)、工学振興会=KTC(工学部)、海神会(海事科学部)、六條会(農学部):9同窓会(12学部)

文窓会東京支部・文学部担当<木曜会>講演会

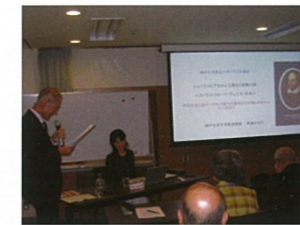
シェイクスピアを語る芦津かつお先生にインタビュー

- 第1回目 「シェイクスピアをめぐる驚きと感動の旅 ~ストラットフォード・ヴェニス・日本~」 時空を超え読み継がれる魅力の解明とその楽しみ方から別人説まで (2017年)
- 第2回目 「シェイクスピア悲劇『マクベス』と黒澤映画『蜘蛛巣城』について」(2019年)



タイトルを見ただけでワクワクする2回の講演会。実際に、講演自体も学部は様々ながら神戸大学OBの参加者に「思わず引き込まれる興味深い内容」と好評でした。この講演について芦津先生にお話を伺いました。

芦津 このインパクトのあるタイトルについては、最初もっと堅苦しいものを考えていたのです。でも、打ち合せの時点で、専門家がこだわるところから少し視点をずらした方が面白いものが出てくるのでは、とこのような題になりました。講義とは違い、聞く方が種々のバックグラウンドを持っていらっしゃるの、私の話が引き金となり、話題や興味を広げてもらえればと考えました。また視覚・聴覚的に実感していただいた方が理解しやすいと思い、講演ではできるだけ舞台や映画のDVDを使いました。



講演風景

シェイクスピアの翻訳・翻案は日本でも坪内逍遙、志賀直哉など多くの作家によってなされ、広く愛好されています。その中で『マクベス』を翻案した黒澤明の映画「蜘蛛巣城」と蛭川幸雄の『NINAGAWA・マクベス』の舞台は、シェイクスピアの精神世界を最も的確に表現したものと高い評価を受けています。蛭川は「(学者の)啓蒙主義や教養主義の手垢にまみれた劇作家」を大衆の手に取り戻し、身近なものと感じてもらうため、『マクベス』を祖先の物語と再解釈し、仏壇セットの中で上演しました。また黒澤は、原作の中に日本人の諸行無常に通じる価値観を見出し、それを映画化しました。

私の研究の姿勢は、日本とリンクさせる視点からの英国文学研究です。翻訳も手掛けていますが、翻訳を行う時に常に考えることは「文化的相当物(Cultural

Counterpart)」ということ。黒澤と蛭川は、シェイクスピアを日本における「文化的相当物」へと置き換え見事に表現している点で、大変参考になります。

講演終了後、茶話会と懇親会が開かれました。活発な質疑応答があり、その感想を尋ねてみました。



芦津先生を囲んで、左は大野 結様(書道会の重鎮、S.38経済学部卒)、文窓会・中野東京支部長、同・武藤会長

芦津 神大の方々のバックグラウンドが広く深いことに驚きました。本やオペラについての質問は想定内でしたが、自分の人生と重ねてのシェイクスピア解釈、また海外赴任を踏まえての実際的な質問等、今まで考えたことのない視点からの質問や発言に驚かされました。また『マクベス』の絵を描いてくださったことも大きな喜びでした。こうした読み方、関わり方こそが本当の文学の楽しみ方ではないかと深く考えさせられました。

今回の聴衆の方々には私より先輩の方が多かったのですが、皆さんのエネルギーに圧倒され、人生を充実させて楽しんでいらっしゃるのを見て、「羨ましい」というのが本音です。このような機会をいただけて、大変勉強になり楽しかったです。ありがとうございました。

芦津かつお先生略歴

京都大学大学院文学研究科博士後期課程(英語学英米文学専攻)単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、Oxford University, Research Associate、大谷大学専任講師・准教授を経て、2010年より神戸大学准教授

文窓会東京支部へのお問い合わせは下記へ

事務局:〒223-0064 横浜市港北区下田町1-1-113 中野 裕  
 TEL & FAX: 045-561-6317 / E-Mail: y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

2019年度 東京支部便り→p27

# 第13回 文学部創立70周年記念 2019年

## 学生レポートコンクール 結果発表

神戸大学文学部に入学し、学生生活においてチャレンジしようとしていること、成し得たもの、今考えていることに関する「文窓賞 学生レポートコンクール」に、今年は14作品の応募がありました。選考会は8月7日に行い、受賞作として下記作品が選ばれました。

\*受賞作品は文窓会ホームページでもご覧いただけます。

### 優秀賞・70周年特別賞(表彰状と賞金5万+3万=8万円)

#### 「留学するということ」 張 曉芸(芸術学専修 M1)

著者の留学は、山形大学への交換留学で始まり、東京大学では芸術理論、神戸大学では中国現代アートと出会った。中国現代アートの研究を進める度に、その発展を阻害する自国の社会の問題が浮き彫りになってくる。様々な人と出会い、学び、そして、自分の考えることをはっきりと発言しようとする姿勢に若者らしい意志と勇気を感じた。文章が少し練れていない箇所があるが、全体を読むのに支障はない。離れることで、自分や自国が見えてくる。「ちゃんと見えてる?」、すべての人に対する問いかけだ。

### 優秀賞(表彰状と賞金5万円)

#### 「忘れ得ぬもの」 山根 彩花(英米文学専修 4回生)

カズオ・イシグロの「忘れられた巨人」の中で提起される問い、「忘れるべきか、覚えておくべきか」が著者の頭をよぎる。神戸や東北の震災関連の記事などに触れるたびに迷いが生じる。しかし、震災遺児の心のケアのために造られた「神戸レインボーハウス」を訪問し、職員と話すことで、自分なりの答えに行きつく。疑問に対し、考え、模索する著者の姿が、明確な文章で語られていた。ただ、結びの部分は、もう少し掘り下げてほしかった。

### 佳作(賞金1万円)

#### 「二日酔いの男と哲学の講義」 上田 慎(哲学専修 4回生)

文学部生であることが好きでなかった著者。バイト先で知り合った中年の料理人の屈託のなさから、ある講義を思い出した。哲学とは、「知ることを愛すること」。そうだ、好きなものを学べばいいんだ、との著者の気付きは学問の本質にもつながる。

### 新人賞(賞金1万円)

#### 「学びたいこと」 石田 七海(1回生)

社会学で学びたいテーマは、戦争とLGBTQにおける差別の問題。いずれも小さい頃に芽生えた関心事だ。大学で知ることを通して、一生学んで考え続ける人になれるようになりたいと語る。この気持ちを持ち続けてほしい。

## 選考を終えて

今年度、12名の委員による選考は、票が大きく割れることなくスムーズに運んだ。

新人賞が創設され、嬉しいことに、8名の1回生からの応募があった。1、2作を除き、新入生らしい素直な作品が多かった。もっと暴れた作品にも出会いたい。

全体として、内容については多様性が少ないのは残念だ。

また、助走が長くて、肝心の所で息切れし、言いたいことが明確でなく、また、突っ込み切れていないという作品が数点あった。全体の構成をしっかりと考えて欲しい。タイトルも重要な要素だ。書く事で見えてくるものがある。毎年書き続けてほしい。

(文責 審査委員長 西川京子)

#### 選考委員

奥村 弘学部長(日本史学教授) 白鳥 義彦副学部長(社会学教授) 長坂 一郎副学部長(心理学教授)  
武藤 美也子 日高 健一 三宅 征彦 田中 賢司 廣野 幸夫 吉田 浩次 西川 京子 中畑 寛之 津田 薫

## 文窓賞：受賞者の今

### 第1回文窓賞を受賞して 一哲学研究者として生きる現在までの歩み

八幡 さくら 東京大学 東アジア藝文書院 特任助教

(2004年入学 哲学専修/博士課程前期課程・後期課程修了 文化構造専攻:哲学)

第1回文窓賞学生レポートコンテストでは、「新しい言語世界の扉を開く」というタイトルで私自身が留学経験の中で発見した言語と世界の繋がりについて書き、優秀賞をいただきました。当時哲学専修4年だった私の周りでは、友人たちの多くが卒業していくことが決まっていた。私は大学院に進学して研究を続けることを決心してはいたものの、少しばかりの不安と寂しさを感じていました。そのような心境の中で文窓会から賞をいただき、授賞式で様々な方から温かいお言葉をかけていただいたことは、神戸大学で研究を続けていく上でとても励みになったことを覚えています。

その後私は博士課程に進学し、ドイツ観念論の哲学者シェリングの芸術哲学研究を進めました。後期課程に在籍中には約1年間、ハンブルク大学との交換留学制度を利用して、「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の長期派遣者として留学することができました。2014年3月に博士論文「シェリング芸術哲学における構想力」をもって博士の学位を取得しました。博士課程修了後は、哲学分野だけでなく、より専門的な美学知識を求めて、日本学術振興会の特別研究員(PD)として東京大学大学院人文社会系研究科美学芸術学研究室に籍を移しました。2年間の特別研究員の後は、縁あって同大学の「共生

のための国際哲学研究センター」(UTCP)と大学院リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム」(IHS)において特任研究員を務めました。現在は、同大学において東京大学と北京大学の協働プログラムである「東アジア藝文書院」(EAA)で特任助教として働いています。

現在の職場では、東アジアを考察対象として研究する従来の地域研究ではなく、「東アジアから」において「世界哲学・世界歴史・世界文学・環境と社会を考える」という、新しいリベラルアーツの創造を目指しています。それは、東アジアに生きる研究者自身の背景や立場、思考方法を反省しながら、これからの人文学のあり方を考える試みでもあります。私は神戸大学において様々な専門領域の授業や、東アジアの他大学との国際会議や研究協力、院プロなどの学域横断的研究などの経験を通じて、狭い領域にとどまらず広い視野を持って様々な人々と協力して研究を進めていくことの重要性を学びました。こうした経験が今の職場での仕事に役立っていると日々感じています。

最後になりましたが、私達後輩を温かく見守ってくださる文窓会の先輩方に深く御礼申し上げます。今後も文窓賞のような素晴らしい機会が学生の方々に提供されることを願っております。



第13回 文窓賞 授賞式は  
ホームカミングデー:10月26日(土)で行います。  
受賞者スピーチも、お楽しみに!



2014年

2018年

写真は過去の受賞者の皆さん

## 文窓賞：受賞者の今

### 生徒の心に火を点ける

酒井 友樹 滋賀県立高校 国語科教員  
(2011年入学 国文学専修)

#### ●はじめに

五年ほど前は毎日のように眺めていたはずの神戸の街と海が、今は遠く感じられます。現在、滋賀の県立高校で国語科の教員をしています。今年は3年生文系クラスの担任をさせていただいています。ここでは主に、私が取り組んできた国語の授業についてご紹介したいと思います。

#### ●国語の授業実践報告

近年、アクティブ・ラーニングやICT機器に注目が集まるなか、これらを授業実践においてどのように導入するかを試行錯誤してきました。アクティブ・ラーニングには様々な手法がありますが、主にペアワークとグループワークに取り組んでいます。発問に対してペアで相談させたり、ワークシートやカードを用いて4人グループでの話し合いをさせたりしています。

これらの方法は講義型の授業とは異なり、生徒の意見を取りあげながら、まとめていかなければなりません。最初は生徒達の予想外の意見に、翻弄されるばかりでした。しかし、何度も失敗を繰り返すうち、次第に、同じ意見や対立する意見を整理することが出来るようになってきました。生徒たちの意見を上手く弁証法的にまとめられた日には、何とも言いようのない充足感を味わえるのが醍醐味です。今でも失敗ばかりなのですが、予定調和でないため、何度やっても新たな発見があり、刺激的な毎日です。

研究授業では実験的な取り組みも何度かさせていただきました。たとえば、「共有地の悲劇」という内容を扱った評論文では、「木こりゲーム」という簡単なゲームを行いました。実際にゲームをするなかで、各グループの利益追求が環境破壊を引き起こすことを検証しました。文章の問題提起を頭で理解するだけでなく、経験として実感させられたのではないかと思います。

私の第一信条は「好きこそものの上手なれ」でして、とにかくまず生徒に国語を好きになって欲しいと思っています。そのために、時にはあえて難しい文学理論に触れたり、時には『ころ』の初版本を持参して見せたりしながら、生徒の知的好奇心をかき立てる術を模



索しています。授業中に小道具なども使っています。ふざけているのかと叱られそうですが、クイズ番組でよく見かける「ピンポン」と「ブー」の音が出るマルバツを示す道具や、「チーン」と鳴る飲食店のレジでよく見かける卓上の呼び鈴などを使いながら、わいわいと楽しい雰囲気です。さらに、この頃ではプロジェクターも活用しています。古典の本文を黒板に直接投影し、そこにチョークで文法事項を書き込んだり、資料写真を提示したりしています。文学史などはパワーポイントでの授業に向いていると思います。ICT機器は大きな可能性を秘めており、今後もいっそう探求を続けたいです。

私が座右の銘にしている、こんな言葉があります。

「凡庸な教師はただ喋る。よい教師は説明する。優秀な教師はやってみせる。最高の教師は生徒の心に火をつける。(ウィリアム・ワード)」

今のところ、ただ喋っていることの方が多いのですが、生徒達を奮起させられるような教師を目指して、これからも指導にあたっていきたいと思っています。

#### ●おわりに

入試制度改革や新しい学習指導要領など、日本の教育は今、大きな変革期を迎えています。これらの改革を前向きに捉え、迅速に対応していきたいと思う一方で、文学作品が、グラフや契約書の読み取りに取って代わられるとすれば、疑問を抱かざるを得ません。子ども達が小説を読まなくなることで、ますます他人の心情を推し量れなくなるのではないかと憂慮します。

また、働き方改革が声高に叫ばれるなか、教員の労働環境が改善されているとはいいたげに思いますが、私自身、1ヶ月の残業時間が100時間を超えることが多いのも事実です。仕事量に対して、人員が少ないのが実態だと感じます。現場の声を反映した教育施策を行って欲しいと切に望みます。

## 新聞記者 1年目を終えて

赤羽 佳奈子 信濃毎日新聞 記者  
(2014年入学 国文学専修)

昨年3月に卒業し、地元である長野県の地方紙、信濃毎日新聞の記者として働いている。記者になって1年と数か月。初々しさが少しずつ冴々しさに変わり、怖い思いをして取材したことも振り返れば笑い話に。怒涛の1年間は新しいことに満ち、混乱の中で、ふとした瞬間に自分が「記者」として働いていることを感じる日々だった。

1年目は事件事故を主な担当として、警察、消防、裁判所に通う日々を過ごした。「夜討ち朝駆け」とはよく聞くが、実際に初めて実行したときは、「本当にこんな世界なんだなあ」と思ったものだ。何かあれば昼夜問わず現場に駆け付け、カメラを向けて取材をする。初めの頃はなんとなく現実味が薄く、自分が実際にそんな「記者のようなこと」をしているとはどこか思い難かった。現場にいち早く到着していたのに、ただただ焦って周囲の状況を正確に把握できず、大事なことを見逃していたこともあった。今は少しだけ前よりも事件への免疫ができたような気がするが、いざというときはやはり焦ってしまう。なるべく社会が安全であることを願って止まない。

とはいえ、長野県と聞いて多くの人が想像できるように、基本的にはのどかな土地である。私が配属されている支社の管内はそこでも特に治安が良く、事件事故のない日がほとんどだった。普段は街での出来事や面白い人などを取材し、記事にする。こちらの仕事は心温まるものが多く、色々な方々の人生に触れ、感動する経験をたくさんさせていただいた。接するものが圧倒的に増えた分、分からないことも増えるばかりだが、書きたいものと書かなければならないものの間を行き来しながら、何とか毎日過ごしている。

就職前に「名刺1枚で誰とでも会える」と言われていたが、その言葉に嘘はなかった。社会に出てわずか数か月の新人にもかかわらず、実績を積んできた「大人」と対等に接することができるのは、とても有り難いことだと思う。さらに言えば、そういう大人と時には本気で喧



嘩ができることも、ある種の特権かもしれない。

仕事をしていると、相手が「これは絶対に書かないでほしい」と言うことを記事にしなければならないこともある。そういうときは相手と話をしながら、どうにか書く方向に持っていくのだが、なかなか上手くいかない。こういう場合に出て来る相手は、自分の人生の何倍もの経験を積んできた「大人」であることがほとんどだ。そして仕事である以上、「何も分かっていない」「もう帰ってくれ」と怒られても帰れない。分からないなりに考えて、生意気にも反論を試みる。大人とぶつかり合っ、納得できないところに向き合っ、何とか折り合いをつけていく作業は、他の仕事の1年目ではあまりできない経験かもしれない。決して喜ばしいことではないが、この仕事をしている以上、こういう経験は今後も続くのだろう。これが誰とでも会える名刺1枚の責任なのだと感じながら、今日も今日とてたくさん名刺を配る。

僭越ながら、1年やってきて気づいた記者の良いところを紹介するならば、「もう二度と立ち直れないのではないか」と思う程の失敗があっても、次の瞬間にはまた新たな課題が生まれるという点だと思う。ごちゃごちゃと悪い方向に考える前に、前の失敗など忘れるほどの失敗が現れるのは、良いことでもあるのかなあ、と最近のはんきに考えている。そうでもなければ考えることが多過ぎて、大変なことになるに違いない。

毎日が新しいことの連続で、失敗を失敗で塗り直し、今日が終わること、また明日が来ることに、日々違う怖さがある。今年からは村を持ち、行政から村の話題までを担当する。1年目を終え、自分が書かなければなかったことになってしまう、埋もれてしまうかもしれない何かを言葉に置き換えて届けられるように、日々心を尽くしていきたいと改めて気を引き締めている。

# 文学部生は、どう学び、どう考え、どう行動したか。

## 文窓賞 受賞者リスト (2018-2007年※降順)

2018年(第12回)			
瀧井 建仁	社会学・博	愚かで奇怪な蝙蝠	優秀賞
辻 啓人	フランス文学	フィリピン留学記	佳作
成田 まお	社会学	「書く」ことについて	佳作
2017年(第11回)			
赤羽 佳奈子	国文学	神戸大学が一人の文学部生に与えたもの	優秀賞
上石田 菜穂	国文学	自分に自信を持つこと	佳作
神谷 菜音	哲学	歩く魚と独り言	佳作
山根 彩花	英米文学	モスクワの夜	佳作
2016年(第10回)			
植木 ゆりいか	英米文学	「誰もいない」どこか	優秀賞
衣笠 美希	フランス文学	おいしいケーキの作り方	優秀賞
田中 昇一	日本史学	「思い上がった謙遜心」による学び	佳作
中澤 篤史	1回生	大人になるという事	佳作
山根 彩花	1回生	茶碗の中の池	佳作
三宅 萌	1回生	「純粋な関係」をめぐる通念と私見	佳作
2015年(第9回)			
赤羽 佳奈子	国文学	机上の空論	優秀賞
筒井 瑞貴	英米文学	留学で得たもの、あるいは薬味の効用に関する一考察	佳作
木村 薫	フランス文学	20年分の「無駄」を生きて	佳作
2014年(第8回)			
赤羽 佳奈子	1回生	詩人になれ	優秀賞
伊石 昂平	西洋史学	二兎を追う者は二兎を得る	優秀賞
北川 和真	地理学	真面目ボランティアの責任	優秀賞
米谷 充史	院	だんじり祭	佳作
2013年(第7回)			
伊石 昂平	西洋史学	過去を振り返って、そして大学生活への抱負	優秀賞
酒井 友樹	国文学	東南アジア、汗まみれ	優秀賞
河内 茉奈	英文学	私の教育実習	佳作
斉賀 万智	国文学	教育実習を終えて	佳作
島谷 貴大	東洋史学	チェッカーコンテストに出場して	佳作
2012年(第6回)			
斉賀 万智	国文学	介護体験で学んだこと、そして夢へと生かす	優秀賞
酒井 友樹	国文学	東日本大震災と私の立ち位置	優秀賞
酒井 愛美	社会学	5年目の挑戦	優秀賞

隅野 友加里	英米文学	マーシャル諸島で見つけたもの	佳作
2011年(第5回)			
高橋 花菜	英米文学	日本人の美德	優秀賞
隅野 友加里	英米文学	夢からできた夢、アメリカでのデパート部員生活	優秀賞
森下 絵理香	日本史学	四年間の大学生生活、次へのステップ	優秀賞
近石 壘	哲学	人を理解すること、人とわかり合うこと	優秀賞
姉川 拓生	英米文学	クリエイティブな毎日	佳作
酒井 友樹	1回生	少年老い易く学成り難し	佳作
日比野 有真	フランス文学	今、自然とは	審査委員長特別賞
2010年(第4回)			
森田 祐未	英米文学	強烈なインド、初めてのバックパッカー	最優秀賞
原田 沙耶	社会学	オーストリアでアルバイト体験	優秀賞
谷本 響司	1回生	文学部生としての意地	優秀賞
三宅 陽平	哲学	普段接する機会がない人と出会って	優秀賞
姉川 拓生	1回生	父と野球、僕の決断	佳作
和木 友絵	1回生	今、重なる～識字教室体験談～	佳作
2009年(第3回)			
高内 江梨子	社会学	空港の自動ドアを抜けて～海外旅行体験を通じて思うこと～	最優秀賞
河本 久葉	英米文学	シアトル、そしてこれからの私	優秀賞
田島 真	社会学	三千円もらって心が重くなった話	優秀賞
2008年(第2回)			
近藤 江梨子	東洋史学	Cheer Up! 神戸大学!	優秀賞
高内 江梨子	社会学	「普通」でない子供たちに出会って	優秀賞
塚本 京平	社会学	打倒、ムコジヨ。～学生記者ROOKS取材記～	優秀賞
真鍋 花菜	西洋史学	自分を信じるということ～私の就職活動奮戦記	優秀賞
生地 進歩	国文学	はちの巣座6月公演復活	佳作
窪田 瞳	言語学	ダンスと私	佳作
下本 晴日	東洋史学	中国留学～出会い～	佳作
2007年(第1回)			
田中 寛樹	東洋史学	韓国留学を通して	最優秀感動賞
塩見 実加	英米文学	デパートを通して世界が見える	最優秀充実賞
百武 由加里	社会学	すべての「出会い」に感謝しよう	優秀賞
八幡 さくら	哲学	新しい言語世界の扉を開く	優秀賞
他佳作11名			

大学院人文学  
研究科社会学の  
OBでもある  
油井清光教授  
藤井勝教授が  
3月末退職  
されました。

●油井 清光教授 1953(昭和28)年生まれ。1981年修士課程、1986年博士課程を修了後、翌年より大学院助手を務め、講師、助教授を経て2000年教授に就任。2016年度から学長補佐を務める。専門分野はパーソナルなどアメリカの社会学理論、特に学説史。

●藤井 勝教授 1955(昭和30)年生まれ。社会学専攻26回生。1980年修士課程、1983年博士課程を修了後、大学院助手、助教授、2005年教授となる。専門分野は経験社会学・地域研究。また人文学研究科長(2012・後期～2014)、神戸大学理事・副学長(2015～2016)を歴任。

## 文窓会(文学部同窓会) — 会計報告 —

平成30年度収支計算書  
(平成30年4月1日～平成31年3月31日)

平成30年度財産目録  
(平成31年3月31日現在)

### 【収入の部】

前年度繰越金	¥21,434,608
今年度収入合計	¥4,616,005
会費納入金	(4,000,000)
協力金	(545,000)
行事受取会費	(69,000)
受取利息	(2,005)
雑収入	(0)
収入合計	¥26,050,613

### 【支出の部】

事業活動費	¥2,502,693
会報費	(1,321,001)
歓送迎会費用	(487,332)
総会費	(329,020)
文窓賞費	(242,840)
ホームページ管理費	(57,700)
名簿管理費	(64,800)
協力金費	¥730,000
学術助成費	(550,000)
学友会費	(110,000)
活動援助費	(50,000)
学祭援助費	(20,000)
事務局費	¥826,937
事務業務委託報酬	(600,000)
家賃・光熱費	(103,147)
通信費	(96,919)
消耗品費	(26,871)
支払手数料	¥31,560
郵便振替料金	(30,480)
振込手数料	(1,080)
旅費交通費	¥43,890
会議費	¥138,125
交際接待費	¥183,480
租税公課	¥336
雑損失	¥1,156
今年度支出合計	¥4,616,005
次年度繰越金	¥21,592,436
支出合計	¥25,804,605
(今年度収支)	(+) ¥ 157,828

I. 資産の部	¥21,592,436
(池田泉州銀行) 普通預金	(111)
(みなと銀行) 普通預金	(4,547)
現金	(100,327)
(ゆうちょ銀行) 普通貯金	(682,897)
(みなと銀行) 定期預金	(1,006,972)
(みなと銀行) 定期預金	(1,510,051)
(ゆうちょ銀行) 振替口座	(4,221,830)
(ゆうちょ銀行) 定期貯金	(6,000,917)
(みなと銀行) 定期預金	(8,064,784)
II. 負債の部	¥0
III. 正味財産合計	¥21,592,436

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

令和1年5月27日

会計監査 花木直彦 印

### 文窓会役員(令和元年9月末現在)

会長 武藤美也子(43年卒・国文学)

#### <その他の役員>

日高 健一(36年卒・芸術学) 花木 直彦(36年卒・国史学)

三宅 征彦(41年卒・社会学) 田中 賢司(42年卒・社会学)

廣野 幸夫(43年卒・社会学) 吉田 浩次(43年卒・社会学)

西川 京子(44年卒・西洋史学) 田中 睦子(46年卒・芸術学)

坂本 直樹(59年卒・社会学)

津田 薫(平22年卒・フランス文学)

中畑 寛之(平13年院修了・フランス文学)

## 2019年度 東京支部便り

### 第14回文窓会東京支部総会および木曜会を下記にて開催した。

**開催場所** 神戸大学東京六甲クラブ 東京都千代田区丸の内3-1-1 帝劇(帝国劇場)ビル地下2階(地下鉄日比谷駅・有楽町駅B3出口すぐ、JR有楽町駅西側5分) TEL 03-3211-2916

**開催日時** 2019年4月25日(木) 11時半から昼食をはさんで14時まで

**出席者(総会)** (敬称略順不同)

守本保彦(昭和28年卒)、村上知(30年)、河野房子(35年)、小宅信吾(35年)、橋本静子(36年)、白藤禮幸(36年)、五味尚子(37年)、浜島代志子(38年)、伊藤順子(46年)、川谷愛作(54年)、絹川ひとみ(54年)、田中勉(47年)、中野裕(36年)、<関西から>武藤美也子(本会会長・43年)、西川京子(本部副会長・44年) 計15名

#### 総会議題

①文窓会総会&木曜会開催について/今後も六甲クラブ主催の木曜会(文窓会担当日)にあわせて、総会を開催することにした。②今後の東京支部の文窓会の運営について/現状中野会長、田中副会長の二人での運営になっているが、本部同様、陣容を充実したい。③東京六甲クラブの件/六甲クラブ会員を増やすように引き続き尽力する、皆様の協力をお願いする。④その他自由発言/武藤本会会長および西川本部副会長より、本部の現況を詳細にわかり説明あり。⑤東京六甲クラブ50周年記念誌が発刊され、総会参加者に席上配布、また六甲クラブの歴代会員及び有志には郵送した。\*文学部創立から現在までの小史を載せているので、ご覧あれ!! このあと、14時30分より、文窓会担当の木曜会(講師:芦津先生)を開催した。(東京支部会長 中野 裕)

\*文窓会東京支部の総会:次回も文学部担当の木曜会(未定ですが2021年になる見込み)に合わせて開催予定。